

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

道地遺跡 g 地点
道地遺跡 h 地点
道地遺跡 i 地点
大和田新田芝山遺跡 d 地点
中ノ台遺跡 a 地点
上谷津台南遺跡 g 地点
北裏畑遺跡 c 地点
高津新田遺跡 d 地点
平沢遺跡 c 地点
川崎山遺跡 p 地点
南海道遺跡 b 地点
小板橋遺跡 d 地点
大和田新田芝山遺跡 e 地点
向山遺跡 g 地点
向山遺跡 h 地点
南台遺跡 c 地点
ヲサル山南遺跡 c 地点
北裏畑遺跡 d 地点
白筋遺跡 c 地点
川崎山遺跡 q 地点

平成 24 年度

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成23年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。報告書作成作業は、平成24年度事業として行った。
2. 本書に収録した発掘調査は、以下のとおりである

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	道地道跡 g 地点	平戸字沼上36-4の一部	平成23年 4月15日～ 平成23年 4月22日	上層54㎡ 下層 8㎡ /552.98㎡	個人住宅	常松成人
	道地道跡 h 地点	平戸字沼上36-4の一部	平成23年 5月10日～ 平成23年 5月17日	上層52㎡ 下層10㎡ /518.52㎡	個人住宅	常松成人
	道地道跡 i 地点	平戸字沼上36-9・10	平成23年 6月10日～ 平成23年 6月16日	上層30㎡ 下層 6㎡ /297.71㎡	個人住宅	常松成人
2	大和田新田芝山遺跡 d 地点	大和田新田字長兵衛野 769-1-3はか	平成23年 4月26日～ 平成23年 5月13日	376㎡/ 4,000㎡	グラウンド整備	宮澤久史
3	中ノ台遺跡 a 地点	小池字西台74-1・2・3 の各一部	平成23年 5月19日～ 平成23年 6月 6日	198㎡/ 1,983㎡	福祉施設建設	常松成人
4	上谷津台南遺跡 g 地点	上高野字上谷津台1100-2 ほか	平成23年 5月26日～ 平成23年 6月 9日	163㎡/ 1,672.24㎡	宅地造成	宮澤久史
5	北裏畑遺跡 c 地点	萱田町字萱田道827-7	平成23年 6月24日～ 平成23年 6月29日	42㎡/ 421.59㎡	個人住宅	常松成人
6	高津新田遺跡 d 地点	八千代台南二丁目18-2、 1-78、18-1の一部	平成23年 7月 4日～ 平成23年 7月14日	278㎡/ 2,955.85㎡	宅地造成	宮澤久史
7	平沢遺跡 c 地点	上高野字平沢152-1	平成23年 7月 6日～ 平成23年 7月20日	200㎡/ 2,000.02㎡	駐車場建設	常松成人
8	川崎山遺跡 p 地点	萱田町字川崎山779、 780、780-2、781-1、字 中台2272-1、2273-1、 2279-1、2280、2280-2	平成23年 8月 2日～ 平成23年 8月12日	上層250㎡ 下層 5㎡/ 2,543.81㎡	宅地造成	常松成人
9	南海道遺跡 b 地点	萱田字西福728-1	平成23年 8月17日～ 平成23年 8月22日	30㎡/ 293.31㎡	宅地造成	常松成人
10	小板橋遺跡 d 地点	大和田字中畑ヶ169-1・ 3・4、165-25、167	平成23年 8月23日～ 平成23年 9月 8日	170㎡/ 1,846.8㎡	宅地造成	常松成人
11	大和田新田芝山遺跡 e 地点	大和田新田字芝山 877-13・15・16・17・ 19・20、878-4・ 8	平成23年 9月20日～ 平成23年10月11日	259㎡/ 2,515.5㎡	宅地造成	常松成人
12	向山遺跡 g 地点	大和田新田字向山 499-1、501-1の一部	平成23年12月27日～ 平成24年 2月10日	792㎡/ 10,813.85㎡	宅地造成	宮澤久史
13	向山遺跡 h 地点	大和田新田字向山 501-2・ 6	平成24年 1月 4日～ 平成24年 1月13日	80㎡/ 820.86㎡	店舗建設	宮澤久史
14	南台遺跡 c 地点	神野字南台795-3、 790-3、保品字架谷 2081-1	平成24年 1月31日～ 平成24年 2月13日	上層181㎡ 下層 8㎡ /1,824.91㎡	駐車場建設	秋山利光

15	ヲサル山南遺跡c地点	大和田新田字ヲサル山 590-1・11、592-1	平成24年2月9日～ 平成24年2月17日	208㎡/ 2,716.71㎡	宅地造成	宮澤久史
16	北裏畑遺跡d地点	荻田町字北裏839、853、 854-2	平成24年2月24日～ 平成24年3月8日	240㎡/ 2,363.25㎡	集合住宅建設	常松成人
17	白筋遺跡c地点	村上字白筋2701、 2694-1、2693-1、2669、 2668の各一部	平成24年2月28日～ 平成24年3月2日	74㎡/ 808.02㎡	店舗建設	宮澤久史
18	川崎山遺跡q地点	荻田字中台2261、2270、 2271-1の各一部	平成24年3月12日～ 平成24年3月19日	190㎡/ 1,885.77㎡	集合住宅建設	常松成人

3. トレンチNo・遺構No等は、数字と記号（アルファベット）の組合せで表記した。記号は、以下のとおりである。

トレンチ T グリッド G 土坑 P 溝跡 M

4. 土層説明・出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については、土壌学及び国際法の基準に従い、以下のとおりである（単位：mm、礫の大きさは長径）。

大礫 200～100、中礫100～50、小礫50～10、細礫10～2、粗砂2～0.2、細砂0.2～0.02

5. 出土した遺物のほか、写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

6. 本書の図版作成は、常松成人・山下千代子・宇都洋子・半澤秀子・増田幸枝・見神光恵が行い、遺物写真撮影・編集・執筆は常松が担当した。なお、南台遺跡c地点の執筆・遺物写真撮影は、秋山利光が担当した。

目次

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

I 調査に至る経緯	1	10 小板橋遺跡 d 地点	38
II 各調査の概要		11 大和田新田芝山遺跡 e 地点	42
1 道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点	6	12 向山遺跡 g 地点	45
2 大和田新田芝山遺跡 d 地点	12	13 向山遺跡 h 地点	48
3 中ノ台遺跡 a 地点	16	14 南台遺跡 c 地点	50
4 上谷津台南遺跡 g 地点	19	15 ヲサル山南遺跡 c 地点	54
5 北裏畑遺跡 c 地点	22	16 北裏畑遺跡 d 地点	57
6 高津新田遺跡 d 地点	25	17 白筋遺跡 c 地点	60
7 平沢遺跡 c 地点	29	18 川崎山遺跡 q 地点	62
8 川崎山遺跡 p 地点	32	報告書抄録	65
9 南海道遺跡 b 地点	35		

挿図目次

第1図 平成23年度調査市内遺跡位置図	3	第16図 上谷津台南遺跡 g 地点トレンチ配置図	20
第2図 道地遺跡 g 地点・h 地点・ i 地点位置図	6	第17図 上谷津台南遺跡 g 地点土層断面図	20
第3図 道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点 遺構配置図	8	第18図 上谷津台南遺跡 g 地点出土遺物	20
第4図 道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点 土層断面図	8	第19図 北裏畑遺跡 c 地点・d 地点・ 川崎山遺跡 p 地点・q 地点位置図	22
第5図 道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点 出土遺物	9	第20図 北裏畑遺跡 c 地点遺構配置図	23
第6図 大和田新田芝山遺跡 d 地点・e 地点 位置図	12	第21図 北裏畑遺跡 c 地点土層断面図	23
第7図 大和田新田芝山遺跡 d 地点遺構配置図	13	第22図 高津新田遺跡 d 地点位置図	25
第8図 大和田新田芝山遺跡 d 地点土層断面図	13	第23図 高津新田遺跡 d 地点遺構配置図	26
第9図 大和田新田芝山遺跡 d 地点 I P 土坑 実測図	13	第24図 高津新田遺跡 d 地点土層断面図	26
第10図 大和田新田芝山遺跡 d 地点出土遺物	13	第25図 高津新田遺跡 d 地点出土遺物	26
第11図 中ノ台遺跡 a 地点位置図	16	第26図 平沢遺跡 c 地点位置図	29
第12図 中ノ台遺跡 a 地点遺構配置図	17	第27図 平沢遺跡 c 地点遺構配置図	30
第13図 中ノ台遺跡 a 地点土層断面図	17	第28図 平沢遺跡 c 地点土層断面図	30
第14図 中ノ台遺跡 a 地点出土遺物	17	第29図 平沢遺跡 c 地点出土遺物	30
第15図 上谷津台南遺跡 g 地点位置図	19	第30図 川崎山遺跡 p 地点トレンチ配置図	33
		第31図 川崎山遺跡 p 地点土層断面図	33
		第32図 川崎山遺跡 p 地点出土遺物	33
		第33図 南海道遺跡 b 地点位置図	35
		第34図 南海道遺跡 b 地点遺構配置図	36
		第35図 南海道遺跡 b 地点土層断面図	36

第36図	南海道遺跡 b 地点 1 P 土坑実測図	36	第54図	南台遺跡 c 地点遺構配置図	51
第37図	南海道遺跡 b 地点出土遺物	36	第55図	南台遺跡 c 地点遺構検出状況図	52
第38図	小板橋遺跡 d 地点位置図	38	第56図	南台遺跡 c 地点出土遺物	52
第39図	小板橋遺跡 d 地点遺構配置図	39	第57図	ヲサル山南遺跡 c 地点位置図	54
第40図	小板橋遺跡 d 地点土層断面図	39	第58図	ヲサル山南遺跡 c 地点遺構配置図	55
第41図	小板橋遺跡 d 地点出土遺物	39	第59図	ヲサル山南遺跡 c 地点土層断面図	55
第42図	大和田新田芝山遺跡 e 地点遺構配置図	43	第60図	ヲサル山南遺跡 c 地点出土遺物	55
第43図	大和田新田芝山遺跡 e 地点土層断面図	43	第61図	北裏畑遺跡 d 地点遺構配置図	57
第44図	大和田新田芝山遺跡 e 地点 1 P 土坑実測図	43	第62図	北裏畑遺跡 d 地点土層断面図	57
第45図	大和田新田芝山遺跡 e 地点出土遺物	43	第63図	北裏畑遺跡 d 地点出土遺物	58
第46図	向山遺跡 g 地点・h 地点位置図	45	第64図	北裏畑遺跡 d 地点 1 P 土坑実測図	58
第47図	向山遺跡 g 地点トレンチ配置図	46	第65図	白筋遺跡 c 地点位置図	60
第48図	向山遺跡 g 地点土層断面図	46	第66図	白筋遺跡 c 地点トレンチ配置図	61
第49図	向山遺跡 g 地点出土遺物	46	第67図	白筋遺跡 c 地点土層断面図	61
第50図	向山遺跡 h 地点遺構配置図	48	第68図	白筋遺跡 c 地点出土遺物	61
第51図	向山遺跡 h 地点土層断面図	48	第69図	川崎山遺跡 q 地点遺構配置図	63
第52図	向山遺跡 h 地点 1 P 土坑実測図	49	第70図	川崎山遺跡 q 地点土層断面図	63
第53図	南台遺跡 c 地点位置図	50	第71図	川崎山遺跡 q 地点出土遺物	63
			第72図	川崎山遺跡 q 地点 1 P 土坑実測図	63

表目次

第 1 表	道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点 出土遺物観察表	9
第 2 表	高津新田遺跡 d 地点 出土遺物観察表	26
第 3 表	小板橋遺跡 d 地点 出土遺物観察表	40
第 4 表	大和田新田芝山遺跡 e 地点 出土遺物観察表	42
第 5 表	ヲサル山南遺跡 c 地点 出土遺物観察表	56
第 6 表	北裏畑遺跡 d 地点 出土遺物観察表	58

写真図版目次

図版 1・2	道地遺跡 g 地点・h 地点・ i 地点	10・11	図版12	小板橋遺跡 d 地点	41
図版 3	大和田新田芝山遺跡 d 地点	15	図版13	大和田新田芝山遺跡 e 地点	44
図版 4	中ノ台遺跡 a 地点	18	図版14	向山遺跡 g 地点	47
図版 5	上谷津台南遺跡 g 地点	21	図版15	向山遺跡 h 地点	49
図版 6	北裏畑遺跡 c 地点	24	図版16	南台遺跡 c 地点	53
図版 7・8	高津新田遺跡 d 地点	27・28	図版17	ヲサル山南遺跡 c 地点	56
図版 9	平沢遺跡 c 地点	31	図版18	北裏畑遺跡 d 地点	59
図版10	川崎山遺跡 p 地点	34	図版19	白筋遺跡 c 地点	61
図版11	南海道遺跡 b 地点	37	図版20	川崎山遺跡 q 地点	64

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして開発が進み、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、さらにその傾向を強め、沿線を中心とした新しいまちづくりが進んでいる。こうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では、千葉県教育委員会の指導のもと、開発事業者等から事前手続きとして提出される「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」（以下「確認依頼」という。）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。確認調査が必要と判断される事業については、国庫及び県費の補助を受け、「市内遺跡発掘調査事業」として調査を実施している。

以下は、平成23年度に実施した「市内遺跡発掘調査事業」の各調査に至る経緯である。

道地遺跡g地点

平成23年3月、杉野朗氏から平戸字沼上の個人住宅建設事業に係る確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、「確認地は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと、「その取扱いについて協議したい」旨（以下「遺跡が所在する旨」という。）を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、事業の進捗のために確認調査を行うこととなった。同月、杉野氏から法第93条第1項の規定による土木工事のための発掘届（以下「法第93条の届出」という。）が提出され、市教委は準備の整った4月15日に調査を開始した。

道地遺跡h地点

平成23年3月、土地所有者の飯田正江氏から平戸字沼上の個人住宅建設事業に係る確認依頼が提出された。確認地はg地点隣接の畑地で、g地点同様に遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、4月に事業者の山本和彦氏・山本裕子氏から法第93条の届出が提出され、5月10日に調査を開始した。

道地遺跡i地点

平成23年5月、中島孝之氏から平戸字沼上の個人住宅建設事業に係る確認依頼が提出された。確認地はg地点・h地点隣接の畑地で、両地点同様に遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月に中島氏から法第93条の届出が提出され、6月10日に調査を開始した。

大和田新田芝山遺跡d地点

平成23年2月、学校法人東邦大学理事長炭山嘉伸氏から大和田新田字長兵衛野のグラウンド整備事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況はグラウンドで、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であった。市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、3月、同大学から法第93条の届出が提出され、4月26日に調査を開始した。

中ノ台遺跡a地点

平成23年1月、社会福祉法人心聖会理事長白鳥征四郎氏から小池字西台の福祉施設建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は宅地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であった。市教委は、

1. 調査に至る経緯

遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、3月、心聖会から法第93条の届出が提出され、5月19日に調査を開始した。

上谷津台南遺跡 g 地点

平成23年2月、大東建設株式会社代表取締役木下博氏から、上高野字上谷津台の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地・山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であるが、大半は平成7年度に発掘調査を完了した区域であり、その際に縄文時代の遺構・遺物を検出した。一部に未調査区域があるので、そこについて確認調査が必要と判断した。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答した。さらに3月に面積追加の確認依頼が提出され、未調査区域であったので同様の回答をし、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、大東建設株式会社から法第93条の届出が提出され、5月26日に調査を開始した。

北裏畑遺跡 c 地点

平成23年5月、青木弘文氏から萱田町字萱田道の個人住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は荒蕪地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、北側隣接地で遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、6月、青木氏から法第93条の届出が提出され、6月24日に調査を開始した。

高津新田遺跡 d 地点

平成23年4月、東海住宅株式会社代表取締役大沢武夫氏から八千代台南二丁目の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は資材置場及び畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、畑地には遺物の散布が確認された。対象地南端には高津新田野馬堀遺跡の堀跡が存在すると考えられたが、資材置場となっており破壊されている可能性も考えられた。このため、遺跡が所在する旨を回答し、高津新田遺跡として確認調査を行うこととした。同月、東海住宅株式会社から法第93条の届出が提出され、7月4日に調査を開始した。

平沢遺跡 c 地点

平成23年5月、蛭間秀夫氏から上高野字平沢の駐車場建設事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、隣接地で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、蛭間氏から法第93条の届出が提出され、7月6日に調査を開始した。

川崎山遺跡 p 地点

平成22年11月、土地所有者である株式会社アサヒ代表取締役社長宮野学氏から萱田町字川崎山・字中台の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は工場で、地表面観察は不可能であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、遺跡が所在する旨を12月に回答した。現状での調査を検討し、協議を重ねたが、現状では不可能と判断し、工場施設撤去後に確認調査を行うこととした。平成23年7月に、事業者である株式会社AHC代表取締役秋山二三雄氏から法第93条の届出が提出され、8月2日に調査を開始した。



第1図 平成23年度調査 市内遺跡位置図
 (八千代都市計画基本図に加筆)

1 調査に至る経緯

南海道遺跡b地点

平成23年6月、土地所有者である濁名まり子氏から萱田字西堀の宅地造成事業のための確認依頼が提出された。確認地の現況は宅地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、遺物の散布が認められた。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、事業者である株式会社アート住宅販売代表取締役寺下睦美氏から法第93条の届出が提出され、8月17日に調査を開始した。

小板橋遺跡d地点

平成23年6月、川城きよ氏から大和田字中畑ヶの宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は駐車場及び畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、畑地には遺物が散布し、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、7月、川城氏から法第93条の届出が提出され、8月23日に調査を開始した。

大和田新田芝山遺跡e地点

平成23年8月、株式会社スワロ代表取締役大矢赫子氏から大和田新田字芝山の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、遺物の散布が認められた。市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、9月、株式会社スワロから法第93条の届出が提出され、9月20日に調査を開始した。

向山遺跡g地点

平成23年11月、尾形久枝氏・高橋礼子氏・高橋諒氏・高橋晃治氏から大和田新田字向山の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、四氏から法第93条の届出が提出され、12月27日に調査を開始した。

向山遺跡h地点

平成23年11月、高橋諒氏から大和田新田字向山の店舗建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は荒蕪地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、12月、高橋氏から法第93条の届出が提出され、平成24年1月4日に調査を開始した。

南台遺跡c地点

平成23年12月、社会福祉法人悠久会理事長清宮弘行氏から神野字南台・保品字栗谷の駐車場建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地及び山林で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、畑地には遺物散布を確認した。市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、平成24年1月、悠久会は法第93条の届出を提出するとともに、伐採や障害物撤去を実施した。市教委は1月31日に調査を開始した。

ヲサル山南遺跡c地点

平成23年12月、株式会社AHC代表取締役秋山二三雄氏から大和田新田字ヲサル山の宅地造成事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、遺物が散布し、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、平成24年1月に、株式会社AHCから法第93条の届出が提出され、2月9日に調査を開始した。

北裏畑遺跡d地点

平成23年12月、河野文昭氏・河野きよ氏から萱田町字北裏の集合住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、両氏から法第93条の届出が提出され、平成24年2月24日に調査を開始した。

白筋遺跡c地点

平成24年1月、株式会社ジョイフル本田八千代店店長平木泰晴氏から、村上字白筋の店舗建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は店舗で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、株式会社ジョイフル本田代表取締役社長矢ヶ崎健一郎氏から法第93条の届出が提出された。ジョイフル本田が店舗資材等を撤去し、市教委は2月28日に調査を開始した。

川崎山遺跡q地点

平成23年12月、河野文昭氏・河野きよ氏から萱田字中台の集合住宅建設事業のための確認依頼が市教委に提出された。確認地の現況は畑地で、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、近隣で遺構・遺物が検出されている。このため、市教委は、遺跡が所在する旨を回答し、取扱いの協議を行った。その結果、確認調査を行うこととなり、同月、両氏から法第93条の届出が提出され、平成24年3月12日に調査を開始した。

Ⅱ 各調査の概要

1. 道地遺跡 g 地点・h 地点・i 地点

遺跡の立地と概要

道地遺跡は、市域北部、新川と神崎川とが合流する地点を東に臨む台地上に所在する。本遺跡においては、これまでに7地点で調査が行われている。弥生時代後期の集落跡、古墳時代前期・中期・後期の集落跡などが検出されており、遺構密度の高い遺跡と認識されている。今回の各地点は、遺跡のやや北寄りに当たり、現況畑地で標高は20.4～20.8mである。近隣の県道で竪穴住居跡が濃密に検出されているが、隣接するf地点では遺構は検出されなかった。互いに隣接する地点であるので3地点をまとめて報告する。

調査の方法と経過

いずれも住宅の基礎への影響を考慮し、建設予定地を避けてトレンチを設定した。

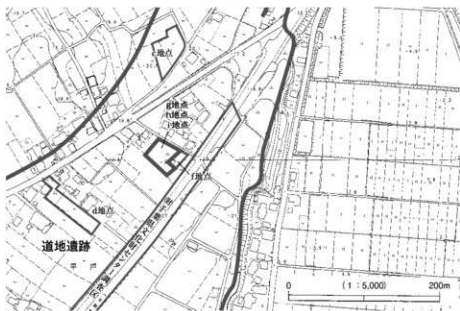
g地点 2m×5mのトレンチを5箇所、2m×2mのトレンチを1箇所合計54m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年4月15日から4月22日で、15日機材搬入、杭設置、トレンチ設定、人力による掘削。18日重機による掘削、トレンチ内精査。18日・20日土層調査、実測記録。20日下層調査、遺物水洗、機材撤収。22日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

h地点 2m×3～5mのトレンチを6箇所、1m×8mのトレンチを1箇所合計52m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年5月10日から5月17日で、10日草刈り、杭設置、トレンチ設定。11日重機による掘削。12日トレンチ内精査。12日・13日土層調査、実測記録。13日下層調査、遺物水洗、機材撤収。17日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

i地点 2m×5m、1.5m×3mのトレンチを各2箇所、2m×7mのトレンチを1箇所合計30m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。



第2図 道地遺跡 g地点・h地点・i地点位置図

調査期間は、平成23年6月10日から6月16日で、10日草刈り、杭設置、トレンチ設定。13日重機による掘削。14日・15日土層調査、実測記録。15日下層調査、遺物水洗、機材撤収。16日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

(1) 土層 土層の観察所見を地点ごとに記す。g 地点 調査区東部のC-4 T北西壁では、I-1層(表土)及びI-2層(耕作土)が厚さ約40cmあり、さらに暗褐色土・褐色土・黒褐色土・ロームブロックの混じり合ったI-3層(攪乱)があったが、一部にIIa層(黒褐色土、褐色土を雲状に含む、腐植堆積土層)、IIb層(暗褐色土、褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層)、IIc層(褐色土、ローム漸移層)、III層(褐色土、ソフトローム)という良好な土層が認められた。III層上面の標高は19.6m前後であった。調査区西部のE-2 T、G-2 TではI-1~3層の厚さが56~76cmあり、III層まで達し、良好な土層は検出されなかった。

h 地点 調査区北部の1 T北西壁では、I-1層及びI-2層がg 地点と同様に厚さ約40cmあり、各種の土が混じり合い、現代ゴミを含むI-3層(攪乱)があったが、IIa層、IIb層、IIc層、III層という良好な土層が認められた。III層上面の標高は19.6~19.7mであった。調査区南部の7 T北西壁ではI-1~3層が深さ60cm前後あり、III層まで達していた。ここでのIII層の標高は20.15m前後とやや高く、IV・V層(ハードローム)は19.9m前後であった。6 Tでは遺構が検出された。その南東壁では、I-1~3層が40~60cm堆積し、III層まで達していた。遺構覆土は黒褐色土(径2mm以下の黄色粒子を含む。)であった。

i 地点 調査区南部の3 Tで遺構が検出された。その北西壁では、他地点と同様に表土・耕作土・攪乱が厚さ28~72cmに達していた。IIa層、IIb層の下に、遺構覆土1(暗褐色土、褐色土を斑状に含む。)覆土2(褐色土)が認められた。またこの遺構を切って、風倒木痕があり、その覆土は、1(暗褐色土・褐色土、明褐色土を斑状に含む。)、2(暗褐色土・褐色土が混じり合う。)、3(褐色土、ソフトローム質)、4(褐色土、ハードローム質)であった。他にIIc層、III層が認められた。III層上面の標高は19.64mであった。

(2) 遺構 h 地点で検出された遺構は、竪穴住居跡の西壁~南西コーナー付近までの約3mほどである。伴出遺物から判断して、弥生時代後期~古墳時代前期のものと考えられる。

i 地点で検出された遺構は、径2.5~3.0mの円形に近い竪穴住居跡で、伴出遺物から判断して、縄文時代中期後半加曾利E3~4式期と考えられる。

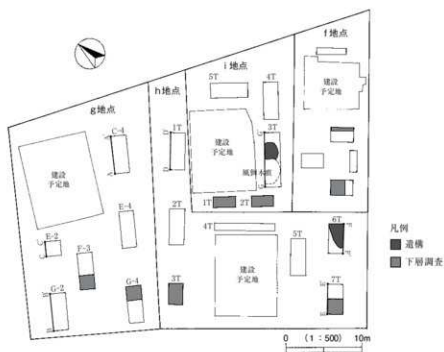
(3) 遺物 第5図及び第1表に示した。g 地点では、土器片31点、小礫1点、すり鉢片2点、合計34点が出土した。うち1点を図示した。

h 地点では、土器片37点、焼成粘土塊5点、小礫4点、合計46点が出土した。うち2点を図示した。

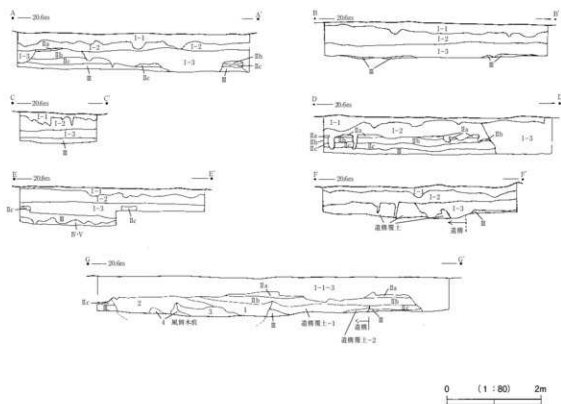
i 地点では、土器片111点、焼成粘土塊3点、石器・剥片・軽石・鉄滓・銭貨各1点、合計119点が出土した。土器片数は接合前の数であり、多くは4に接合し、4~7の同一個体破片と判断される。剥片は頁岩、銭貨は大正十一年の一銭銅貨で、ともに4 T攪乱から出土した。10点を図示した。

調査のまとめ

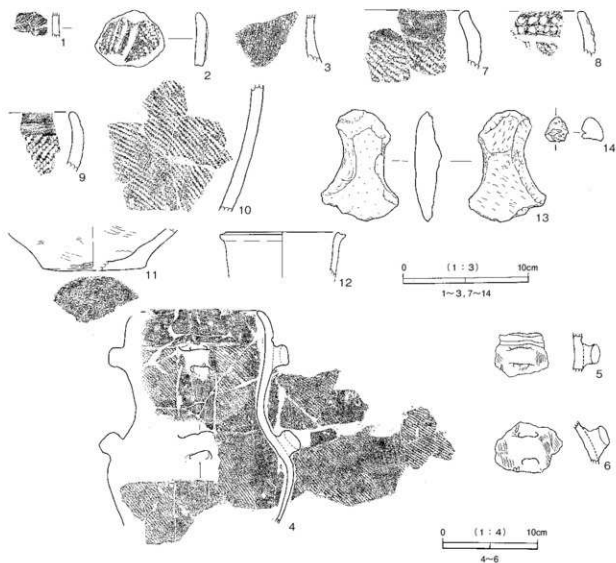
道地遺跡の一角を、平成22・23年度にわたりf~i 地点まで合計1,617.35㎡を調査したことになる。4 地点についてまとめると、全体的に表土、耕作土、攪乱が厚く認められたが、良好な土層も残存していた。遺構は、h 地点で弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴住居跡、i 地点で縄文時代中期後半加曾利E3~4式期の竪穴住居跡が検出された。弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴住居跡は、県道の調査で76軒検出されており、本遺跡での主体となる時期である。加曾利E3~4式も県道の調査で、縄文時代の中では最もまとまって出土している。遺物は、土器片205点、焼成粘土塊8点、すり鉢2点、石器2点(磨石・打製石斧)、小礫6点、剥片・軽石・鉄滓・銭貨各1点の合計227点である。土器片は縄文時代前期・中期、弥生時代後期~古墳時代初頭などが見られたが、その約44%はi 地点3 Tの縄文時代住居跡からの出土であり、数個体が細



第3図 道地遺跡g地点・h地点・i地点遺構配置図



第4図 道地遺跡g地点・h地点・i地点土層断面図



第5図 道地遺跡g地点・h地点・i地点出土遺物

第1表 道地遺跡g地点・h地点・i地点出土遺物観察表(第5図)

No.	出土地点	器種・器形	部位・状態	計測値(mm)	○胎上/石材 ●色澤	形状・調整・文様などの特徴	その他
1	g地点E-2T 1層	壺	口縁付皮 やぐら丸	—	○胎上 ●外: 灰褐色 内: 赤褐色	(外) 縄文L.RとR.Lによる羽状縄文 内) ナデ	先秦後期
2	h地点5T	土器片口縁	胴部	35×45×厚59 21.5g	○粗砂多 ●灰褐色	(外) 深溝・沈線・縄文L.R	縄文中期 加賀川E式
3	h地点6T住 登	壺	胴部	—	○細砂 ●外: 褐色 内: 淡褐色・褐色	(外) 縦方向ミギキ歯帯 内) ナデ、丸れている	先秦後期～ 古地面期土器部
4	i地点3T	深鉢	口縁・胴下部 器面欠い 接合多数	径元117(126) 残存高224	○粗砂多・赤褐色粒子 ●外: 淡赤褐色・ 淡褐色・淡褐色、黒灰色 内: 黒褐色	(外) 縁位の縁取取っ手が縁の上下に付く。 無彫縄文L・沈線・ナデ・ミギキによる滑 縄文	
5	i地点3T	深鉢	取っ手部	—	○粗砂多 ●黒褐色・灰褐色 淡褐色	(外) 縦横方向のへつ割り・縦方向ミギキ 内) 沈線・無彫縄文L 内) ナデ、ミギキ	
6	i地点3T	深鉢	取っ手部	—	○粗砂多 ●灰褐色・灰褐色	(外) 沈線・無彫縄文L 内) ナデ、ミギキ	縄文中期 加賀川E3～4式
7	i地点3T	深鉢	口縁部 器面欠い	—	○粗砂多 ●灰褐色・黒灰褐色	(外) 深溝・縄文L.R・ナデ 内) ナデ	
8	i地点3T	深鉢小鉢	口縁部	—	○細砂・細砂 ●外: 褐色・淡褐色 内) 淡褐色	(外) 2向の円文・沈線・縄文L.R 内) 縦方向のミギキ	
9	i地点5T 焼瓦	鉢	口縁部	—	○粗砂 ●外: 褐色・淡褐色 内) 褐色	(外) 縦方向のナデ・ミギキ・縄文L.R 内) 縦方向のナデ	
10	i地点3T	深鉢	胴下部 8点接合	—	○細砂・細砂・赤褐色粒子 ●黒褐色	(外) 縄文L.R 内) ナデ・縦方向ミギキ	
11	i地点4T 焼瓦	婁	底部	径元底径80	○粗砂・細砂・石英 ●外: 淡褐色・黒 灰色 内: 黒褐色・灰褐色	(外) 内) へつ割り歯ナデ・ミギキ 底(外) へつ割り歯ミギキ	土器部
12	i地点4T 焼瓦	長筒形	口縁部	径元117(100)	○細砂 ●外: 灰白色 内) 灰白色・灰褐色	ロケロ成形	須恵器
13	i地点3T	分銅型 打製石斧	一部欠損	長88×幅61×厚521 89.6g	○軟質 ●灰白色	両片利用、基部は一部割って成形	縄文時代石器
14	i地点4T 焼瓦	砥石か 焼瓦	欠損	19×18×17 1.6g	○粒石 ●灰白色	V字形切り込みあり	

II 各調査の概要

かく割れたものである。この地点以外の遺物密度は低かった。

やや県道寄りに2つの遺構が存在し、県道から離れると遺構は無くなるという傾向を把握できた。本遺跡の遺構・遺物分布に関する新知見を得た。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1986年）『千葉県八千代市平戸道地遺跡—農業道路敷設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（a地点）

財団法人千葉県文化財センター（2004年）『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2—八千代市道地遺跡—』

財団法人千葉県教育振興財団文化財センター（2006年）『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5—八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）—』

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度』（c地点、d地点）

八千代市教育委員会（2009年a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』（e地点確認調査）

八千代市教育委員会（2009年b）『千葉県八千代市道地遺跡e地点・平戸台8号墳—資材置場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』（f地点）

図版1 道地遺跡g地点・h地点



(1) 調査前状況



(2) g地点調査状況



(3) g地点A-A' 土層断面



(4) h地点調査状況

図版2 道地遺跡g地点・h地点・i地点



(1) h地点6T遺構検出状況



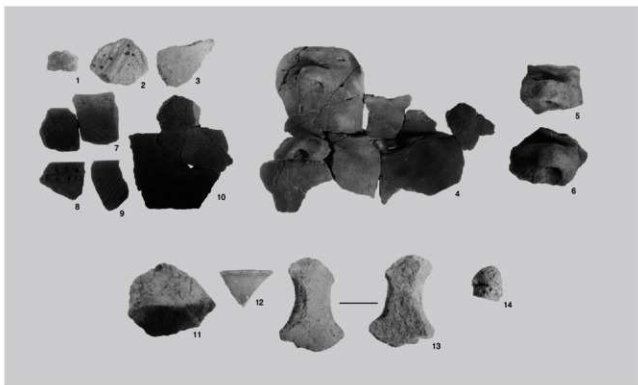
(2) i地点調査状況



(3) i地点3T遺構検出状況



(4) i地点3T遺物出土状況



(5) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

2. 大和田新田芝山遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

大和田新田芝山遺跡は、市域の西部、桑納川の低地から南西に入る花輪谷津に臨む台地上に立地する。これまでの調査では、谷津に面する遺跡西部～南西部を中心に旧石器・縄文・平安時代の遺構や遺物が検出されている。d 地点は、密度が薄くなる台地中央側標高26.9m前後のグラウンドの一部である。

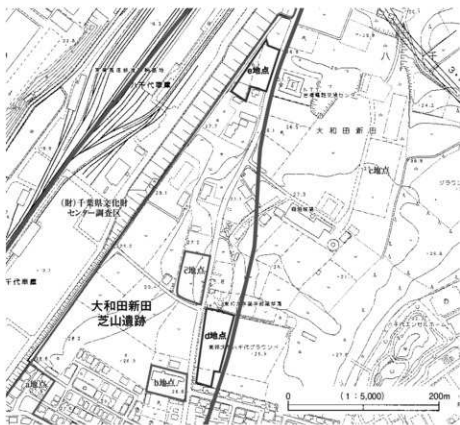
調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画してグリッドとし、各グリッドに2m×4mのトレンチを2箇所ずつ設定した。調査区南部のフェンスで分けられた部分には2m×10mのトレンチを2箇所設定した。トレンチ面積は合計376㎡で、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。トレンチNoは、アルファベットと数字の組み合わせで表現し、さらにその中を5m四方で区画して1～4の枝番号を付した。

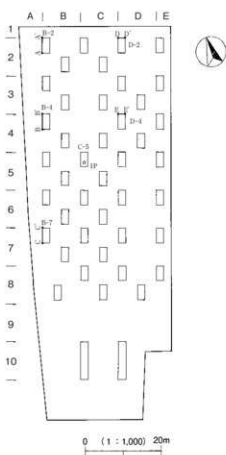
調査期間は、平成23年4月26日から5月13日で、4月26日機材搬入、杭設置。26日・27日トレンチ設定。27日～5月2日人力による掘削、土層調査。2日～6日重機による掘削。2日～10日トレンチ内精査。9日・10日下層調査、遺構調査。10日～13日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

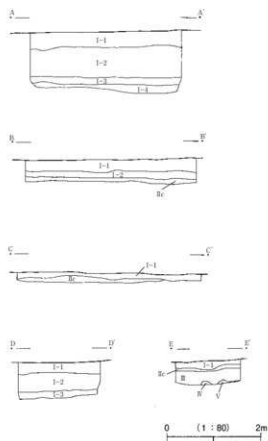
土層の観察所見としては、調査区北部のB-2-1 G北西壁では、I-1層（表土、暗褐色土）、I-2層（黒褐色土）、I-3層（暗黄褐色土）、I-4層（暗褐色土）が厚さ116～130cmに達し、その直下はハードロームであった。切土の後に埋戻し、整地したものと判断した。B-4-1 G北西壁では、I-1層、I-2層が厚さ33～40cmあり、その下はIIc層（褐色土、ローム漸移層）が約10cmの厚さであった。B-7-1 G北西壁では、



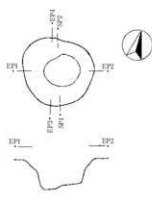
第6図 大和田新田芝山遺跡 d 地点・e 地点位置図



第7図 大和田新田芝山遺跡 d 地点遺構配置図



第8図 大和田新田芝山遺跡 d 地点土層断面図



第9図 大和田新田芝山遺跡 d 地点 1P 土坑実測図



第10図 大和田新田芝山遺跡 d 地点出土遺物

II 各調査の概要

表土は厚さ10～17cmと薄くなり、その下はⅡc層が0～12cmの厚さであった。全体として良好な土層は確認されなかった。

遺構は、C-5-1Gで円形の土坑が検出された。トレンチ内で1基のみの検出であるため完掘した。規模は上面72cm×77cm、底面34cm×38cm、深さ25～34cmである。遺物は出土しなかったが、規模や覆土から奈良・平安時代の土坑と判断した。

遺物としては、土器片7点、陶磁器片15点、石鏃・鉄滓・焼成粘土塊各1点の合計25点が出土した。このうち3点を図示した(第10図)。1・2は、縄文土器で、1は、刺突・ヘラ削り・ナデが施される。外面赤褐色、内面灰褐色で粗砂を含む。B-2Gから出土した。2は、粗い縄文が施される。外面淡褐色、内面褐色で粗砂を含む。C-7-4Gから出土した。3は、チャート製の石鏃で、最大長21mm、最大幅13mm、最大厚3.5mm、重さ0.9gである。B-6-4Gから出土した。

調査のまとめ

遺構としては、奈良・平安時代の土坑1基を検出・調査した。遺物は、縄文土器・縄文時代石鏃などが出土した。

本遺跡に関する調査報告書

財団法人千葉県文化財センター(1989年)『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡—東葉高速鉄道引き込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書—』

八千代市西八千代遺跡群調査会(1996年)『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他発掘調査報告書—西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査—』(a地点)

八千代市教育委員会(2004年)『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』(b地点)

八千代市教育委員会(2008年)『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度』(c地点)

図版3 大和田新田芝山遺跡 d 地点



(1) 調査状況



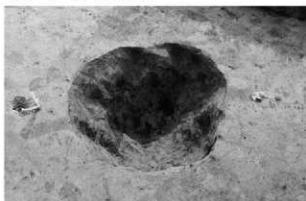
(2) B-2-1G北東壁土層断面



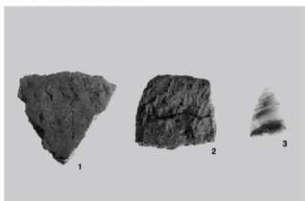
(3) E-E' 土層断面



(4) 1P土坑土層断面



(5) 1P土坑完掘状況



(6) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

3. 中ノ台遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

中ノ台遺跡は、市城の北部、神崎川を北に臨む台地上に立地する。本遺跡については今回が初めての調査であるが、西に隣接する作山遺跡では弥生時代後期の集落跡などが検出されている。a地点は、遺跡南西部の標高20.5～20.9mの台地上平坦部である。

調査の方法と経過

開発区域の形状に合わせて10mごとに区画し、それに沿ってトレンチを設定するとともに、植栽などを避けて任意のトレンチを設定した。計198㎡分のトレンチを設定し、人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年5月19日から6月6日で、5月19日機材搬入・杭設置。20日トレンチ設定、人力による掘削。23日・25日重機による掘削。23日・25日・26日トレンチ内精査。26日・27日・31日・6月1日土層調査。1日遺物水洗、機材撤収。3日・6日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、溝跡を検出した調査区北部のA-2 G南東壁は、I-1層（ビニールゴミを含むしまりの弱い暗褐色土）、I-2層（黒褐色土・暗褐色土、炭化材片・黄色スコリアを多量含む）、II-1層（しまりの弱い暗褐色土）、II-2層（暗褐色土でII-1よりしまり強い。黄色スコリアを多量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む）、II-3層（暗褐色土・褐色土、ローム混じり）、III層（褐色土、ソフトローム）、溝跡覆土（しまりのやや弱い暗褐色土・褐色土で、ローム・ロームブロック混じり）であった。III層上面の標高は、20.6m前後である。C-2 G北西壁も基本的に同じであった。これらの南東に当たるD-3 G北西壁では、II-1層に焼土粒子を少量含む、IIc層（褐色土、ローム漸移層）が認められた。III層上面の標高は、20.5m前後である。

調査区南西部の1 T南壁は、暗褐色土・褐色土が混じり合った攪乱が多くを占め、I-2層、IIb層（暗褐色土・褐色土、新期富士テフラ層、黄色スコリアを含む）、IIc層、III層、IV・V層（ハードローム）であっ



第11図 中ノ台遺跡 a 地点位置図

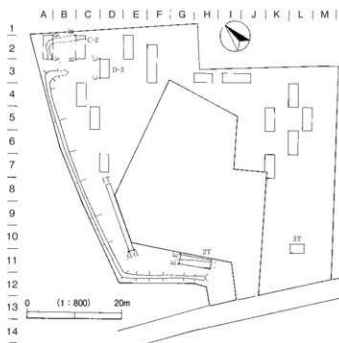
た。Ⅲ層上面の標高は、20.43m、Ⅳ・Ⅴ層上面の標高は、20.32mである。同じく2T北西壁は、Ⅰ-3層（しよりの弱い黒褐色土）、Ⅱ-4層（しよりの弱い暗褐色土）、Ⅱ-5層（暗褐色土でⅡ-1よりしよりの強い。黄色スコリアをまばらに含む）、Ⅱ-6層（暗褐色土、黄色スコリアをまばらに含む）、Ⅲ層であった。Ⅲ層上面の標高は、20.36mである。

遺構としては、溝跡がA-2G、C-2G、2Tで検出された。溝跡の幅は、60~80cmである。出土遺物から近世の溝跡と判断した。なお、調査区西端には土塁状の高まりがある。ここには工事が及ばず、現状のまま残すとのことであったので、調査による掘削を避けた。盛土のしよりの具合や大径木が生えていることから、ある程度古い時期のものとして推定されるが、性格などについては所見を得ることができなかった。

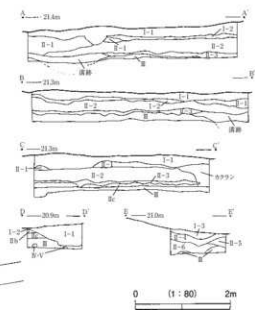
遺物は、近世・近現代の土器片・陶磁器片などが18点出土した。うち2点を図示した（第14図）。1は内耳土鍋の口縁・把手部。外面暗褐色、内面橙色、細砂・粗砂を含む。外面上半は横ナテ痕が顕著であるが、下半には亀裂が入っている。A-2Gから出土した。2は素焼土器の口縁部。外面黒褐色・暗褐色、内面淡橙色、細砂・粗砂を含む。外面横ナテ痕・輪積み痕があり、内面横ナテ痕である。F-2~3Gから出土した。

調査のまとめ

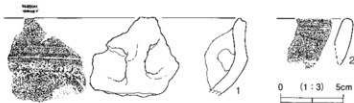
古墳時代前期土師器、近世内耳土器・泥面子が出土した。遺構は近世溝跡が検出された。



第12図 中ノ台遺跡a地点遺構配置図



第13図 中ノ台遺跡a地点土層断面図



第14図 中ノ台遺跡a地点出土遺物

図版4 中ノ台遺跡a地点



(1) 調査状況



(2) 調査状況 (1T)



(3) A-A' 土層断面



(4) C-C' 土層断面



(5) A-2T溝跡検出状況



(6) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

4. 上谷津台南遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は、市域の南東部、佐倉市との市境付近に所在し、井野上谷津に臨む台地上に立地する。本遺跡については、これまでに6地点が調査され、遺構としては縄文時代の狩猟用陥穴が、遺物としては縄文時代後期堀之内式～加曾利B式の土器や石器が検出されている。

今回は、開発区域の大半はa地点に含まれており調査は完了している。調査地点はa地点の西と東にそれぞれ接した区域で、標高26m前後の台地上平坦面である。

調査の方法と経過

調査区西側の地点は形状に合わせて10mごとに区画してグリッドとし、これを基に2m×4mのトレンチを設定した。東側の地点には任意に1m×3mのトレンチを設定した。トレンチ面積は合計163㎡で、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。トレンチNoは、アルファベットと数字の組み合わせで表現し、さらにその中を5m四方で区画して1～4の枝番号を付した。

調査期間は、平成23年5月26日から6月9日で、5月26日機材搬入等環境整備。27日草刈り、杭設置。30日・31日トレンチ設定。31日～6月3日人力による掘削、土層調査。3日・6日重機による掘削、トレンチ内精査。7日機材整備、人力による埋め戻し。8日・9日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北部のA-2-4G西壁では、I-1層（表土、しまりの弱い暗褐色土）、I-2層（暗褐色土）、I-3層（黒褐色土）が厚さ60cmあり、その下はIIc層（褐色土、ローム漸移層）が4～12cmの厚さであった。A-4-4G西壁では、I-1層、I-2層、I-3層がやはり厚さ60cmあり、その下はIII層（褐色土、ソフトローム）であった。全体として良好な土層は確認されなかった。

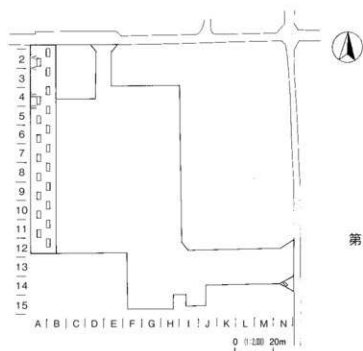
遺構は検出されなかった。

遺物は、土器片等4点が出土し、縄文土器片や泥面子等5点を地表面採集（以下「表採」とする。）した。うち3点を図示した（第18図）。1は素焼土器の底部で、半球形の脚が付く。ロクロ成形で横方向のナデ痕

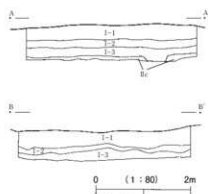


第15図 上谷津台南遺跡 g 地点位置図

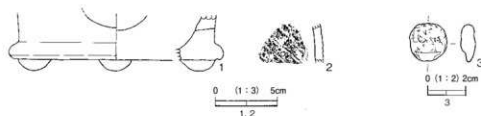
II 各調査の概要



第16図 上谷津台南遺跡g地点トレンチ配置図



第17図 上谷津台南遺跡g地点土層断面図



第18図 上谷津台南遺跡g地点出土遺物

が顕著である。体部に透かし孔がある。復元底径17cm。暗褐色・橙色で、細砂・粗砂・細礫を含む。B-5 Gから出土した。2は縄文土器の深鉢で、斜方向の条線が施される。外面淡褐色・淡橙色、内面橙褐色で粗砂を含む。加曾利B式の粗製土器と考えられる。3は泥面子で、型抜きの子の顔と考えられる。一部欠損。最大長20mm、最大幅19.5mm、最大厚7.5mm、淡橙色である。2・3は表採である。

調査のまとめ

遺物密度は低く、遺構は検出されなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会 (1997年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』(a地点, b地点)

八千代市教育委員会 (2000年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』(c地点)

八千代市教育委員会 (2002年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』(d地点)

八千代市教育委員会 (2007年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』(e地点)

八千代市教育委員会 (2012年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』(f地点)

図版5 上谷津台南遺跡 g 地点



(1) 西側地点調査状況



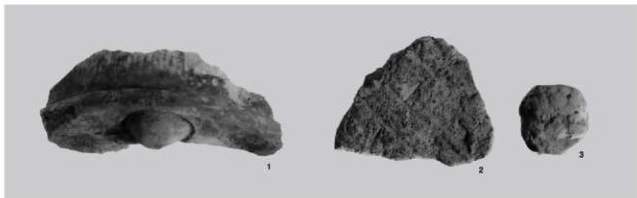
(2) 東側地点調査状況



(3) B-B' 土層断面



(4) B-4-1G 北壁土層断面



(5) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

5. 北裏畑遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

北裏畑遺跡は、市域の南部、国道296号線（成田街道）の北側に接して存在し、新川西岸の台地上、標高20～25mに立地する。c地点の北に隣接するa地点では、近世以降の遺物が出土し、遺跡南東部のb地点では、縄文時代陥穴1基、近世土坑3基、溝状遺構2条を検出した。

今回の地点は、標高24～25mの台地上平坦面である。

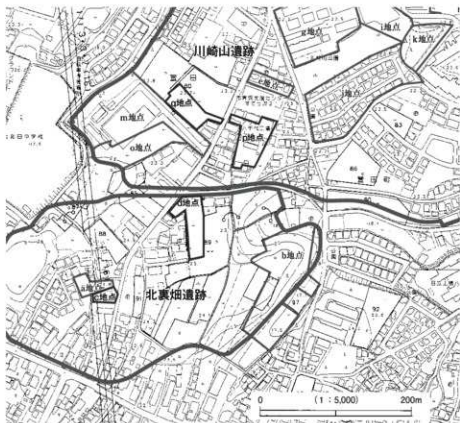
調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、1.5～2m×4～5mのトレンチを任意に7箇所計42㎡分設定した。人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

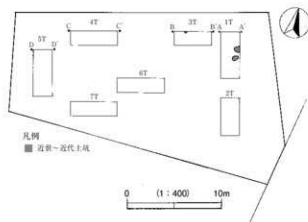
調査期間は、平成23年6月24日から29日で、24日機材搬入、トレンチ設定、人力による掘削。27日重機による掘削、トレンチ内精査。27日・28日土層調査。29日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

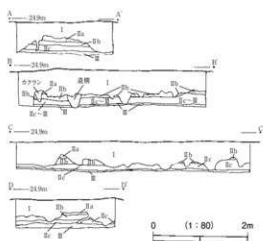
調査区は平坦面であるが、東がわずかに高かった。土層の観察所見としては、表土・攪乱層が厚く堆積していたがⅡa層以下の基本土層を確認した。調査区西部の5 T北壁では、Ⅰ層（黒褐色・灰褐色の表土）、Ⅱa層（黒褐色土、腐植堆積土層）、Ⅱb層（暗褐色土で褐色土が斑状に入る、新期富士テフラ層）、Ⅱc層（暗褐色土・褐色土、ローム漸移層）、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）であった。Ⅲ層上面の標高は24.14～24.19 mである。3 T北壁では土坑の断面を確認し、その覆土は暗褐色土・褐色土であった。東部の1 T北壁では、Ⅲ層上面の標高は24.21～24.25mと若干高かった。



第19図 北裏畑遺跡c地点・d地点、川崎山遺跡p地点・q地点位置図



第20図 北裏畑遺跡 c 地点遺構配置図



第21図 北裏畑遺跡 c 地点土層断面図

遺構は、1 Tで土坑2基、3 Tで土坑1基が検出された。遺物は無く、プランの明瞭なあり方から近世～近代の土坑と判断した。1 Pは長楕円形で規模72×43cm、2 Pは不整形で検出部分は65×57cm、3 Pの検出部分は30×18cmである。

遺物は出土しなかった。

調査のまとめ

近世以降の土坑3基を検出した。遺物は出土しなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（a地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市逆水遺跡 f 地点ほか—不特定遺跡発掘調査報告書V—』（b地点）

圖版6 北裏烟遺跡c地点



(1) 調查狀況



(2) A-A' 土層断面



(3) D-D' 土層断面



(4) I T完掘狀況

6. 高津新田遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

高津新田遺跡は、市域西南部、千葉市との市境付近に所在する。市域南部を流れる高津川の低地から南西方向に入る足太谷川の谷奥に、さらに西に入る支谷があり、この支谷を囲む一帯が遺跡である。本遺跡には重複して千葉市との市境付近に高津新田野馬堀遺跡がある。江戸幕府の直轄領であった小金牧に属する下野牧の南東端に当たる。

本遺跡においては、これまでに3地点で調査が行われ、縄文時代早期の竪穴住居跡や土坑、近世の溝跡などが検出されている。今回の地点は、本遺跡 a 地点及び高津新田野馬堀遺跡 f 地点の北西隣接地に当たる標高22~27mの台地上平坦部~斜面であり、縄文時代の遺構・遺物、野馬堀の存在が予想された。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて10mごとに区画してグリッドとし、2m×4mを基本としてトレンチを設定した。調査区南西端の道路沿いの資材置場となっている地点には、地下に野馬堀が存在している可能性があり、2m×5~7mの長いトレンチを設定した。トレンチ面積は合計278㎡で、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年7月4日から14日で、4日機材搬入。4日~6日草刈り・現場封鎖等環境整備。5日杭設置。5日・6日トレンチ設定。6日~11日人力による掘削。8日・11日重機による掘削。8日~13日トレンチ内精査、土層調査。14日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北部のD6-1G東壁では、ソフトローム層までに60~130cmの比較的厚い堆積を確認したが、全体としては良好な土層は確認されなかった。

遺構は、道路沿いの4箇所のトレンチにおいて道路に並行する溝跡2条を検出した。近世の野馬堀と判断した。北側の緩斜面部には遺構は検出されなかった。

遺物は、施軸陶器片43点、磁器片34点、素焼土器片33点、素焼瓦片25点、小礫・礫片26点、焼成粘土塊18点、近世かわらけ片8点、瓦質土器片・泥面子各6点、須恵器片・鉄製品各5点、陶器（無軸）片3点、すり鉢片・七輪片・ガラス製品各2点、石墨・玩具各1点、合計220点が出土した。他に泥面子等の表採品が174点である。うち9点を図示した（第25図・第2表）。



第22図 高津新田遺跡 d 地点位置図

調査のまとめ

近世の陶磁器等が出土し、近世野馬堀と見られる溝跡2条を検出した。小金牧に関わる高津新田野馬堀遺跡のk地点と命名した。縄文時代の遺構・遺物は検出されなかった。

高津新田遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2000年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成12年度』（b地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市逆水遺跡f地点ほか―不特定遺跡発掘調査報告書V―』（c地点）

高津新田野馬堀遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1991年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成2年度』（d地点）

八千代市教育委員会（1991年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度』（e地点）

八千代市遺跡調査会（1999年）『千葉県八千代市高津新田野馬堀』（b地点）

八千代市教育委員会（2002年a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（i地点）

八千代市教育委員会（2002年b）『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』（g地点）

八千代市遺跡調査会（2007年）『千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡h地点』

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』（j地点）

図版7 高津新田遺跡d地点（1）



(1) 調査前状況-1-



(2) 調査前状況-2-



(3) A-A' 土層断面



(4) D-6G南壁土層断面

図版8 高津新田遺跡d地点(2)



(1) E 2-3G野馬掘検出状況



(2) D 2-3G野馬掘検出状況



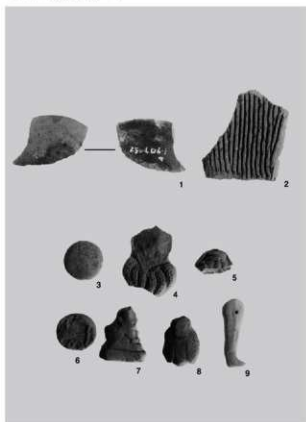
(3) C 2-1G野馬掘検出状況



(4) 調査状況-1-



(5) 調査状況-2-



(6) 出土遺物(番号は実測図の番号と同じ)

7. 平沢遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

平沢遺跡は、市城の東部、森下谷津～西谷津を北～西に臨む台地上に立地する。

本遺跡においては、これまでに2地点で調査が行われている。弥生時代後期の集落跡を主体とする遺跡と捉えられている。今回のc地点は、遺跡南西部b地点の南に接し、標高19～24mの台地上～斜面である。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、2m×3～10mのトレンチを19箇所、合計200㎡分設定した。重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

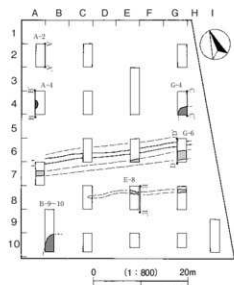
調査期間は、平成23年7月6日から20日で、6日機材搬入、草刈り等環境整備。6日・7日杭設置、トレンチ設定。8日・11日・12日重機による掘削、トレンチ内精査。11日～14日土層調査、実測記録。19日・20日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

調査区は、北に向かって低くなる。また、調査区のほぼ中央を横断するように溝跡状の窪みとそれに平行する高まりが認められた。土層の観察所見としては、標高の高い南部のE-8 T南東壁では、I-1層（暗褐色土、表土）及びI-2層（暗褐色土、旧表土）があり、その下にIIa層（暗褐色土・黒褐色土、腐植堆積土層）、IIb層（暗褐色土、褐色土を夾状に含む、新期富士テフラ層）、IIc層（暗褐色土・褐色土、ローム漸移層）、III層（褐色土、ソフトローム）という良好な土層が認められた。III層上面の標高は23.58～23.68mであった。ここでは前述した中央のものとは別の溝跡が検出され、覆土上層はI-1層が厚く堆積し、その下に暗褐色土・褐色土で径5cmのロームブロックをまばらに含む土（1）が堆積していた。この溝跡は不整形で、G-8 Tではごく浅く、C-8 T内で途切れていた。調査区東部のG-6 T北西壁では、調査区中央を横断する溝跡とそれに平行する高まりの土層を観察した。I-1層及びその下のI-3層（しまりの弱い暗褐色土）が高まりの土であり、溝を掘った際の廃土を盛り上げたものと推測した。さらにその下では、IIa層など良好な堆積を確認した。溝跡の覆土（2）は暗褐色土・黒褐色土で、溝跡の幅は1～1.85mであった。このトレンチで



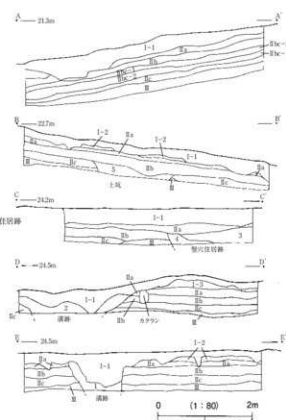
第26図 平沢遺跡c地点位置図



第27図 平沢遺跡c地点遺構配置図



第29図 平沢遺跡c地点出土遺物



第28図 平沢遺跡c地点土層断面

のⅢ層上面の標高は23.5～23.63mとやや低くなる。その北側のG-4 Tでは、弥生時代の堅穴住居跡と考えられる遺構が検出された。住居の北西コーナー付近と考えられ、遺構覆土はⅡa層に覆われ、3は黒褐色土、4は褐色土がにじむ暗褐色土である。ここでのⅢ層上面の標高は23.3～23.4mとさらに低くなる。調査区北部のA-4 Tでは1.6×0.5mの規模の土坑を検出した。覆土はⅡb層に覆われ、5は暗褐色土・褐色土である。ここでのⅢ層上面の標高は21.48～22.0mである。調査区北端のA-2 T南東壁では、Ⅱb層とⅡc層の間に2層を認識し、Ⅱb c-1層はⅡb層に比べ褐色土が主体になり、Ⅱb c-2層は褐色土がにじむ暗褐色土で谷部に厚く堆積する土である。ここでのⅢ層上面の標高は19.56～20.4mとなる。

遺構は、A-4 Tから土坑1基、B-10T・G-4 Tから堅穴住居跡が各1軒検出された。土坑は縄文時代のもの、B-10Tの住居跡は住居の北西壁付近と考えられ、G-4 Tの住居跡とともに弥生時代後期と判断した。溝跡は2条あるが、いずれも近代以降のものと判断した。

遺物は、土器片7点が出土した。うち3点を図示した(第29図)。1は縄文土器深鉢の口縁部で、口唇上に刻みがある。器面は脆く荒れている。G-6 Tから出土した。2は弥生土器の口辺部で、複合口縁の下端部に刻みがある。堅穴住居跡が検出されたG-4 Tから出土した。3は、弥生土器の胴下部で、附加条縄文RL+2Lが施文されている。堅穴住居跡が検出されたB-10Tから出土した。

調査のまとめ

弥生時代後期の堅穴住居跡が2軒検出され、本地点でもa・b地点と同様、弥生時代後期の集落跡を中心とする遺跡が展開していることがわかった。また縄文時代の遺構・遺物も散在していることが確認された。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2011年a）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』（b地点確認調査）

八千代市教育委員会（2011年b）『千葉県八千代市平沢遺跡b地点—特別養護老人ホーム建設に先行する埋蔵文化財発掘調査—』（b地点本調査）

図版9 平沢遺跡c地点



(1) 調査状況



(2) A-4T・B-B' 土層断面, 土坑検出状況



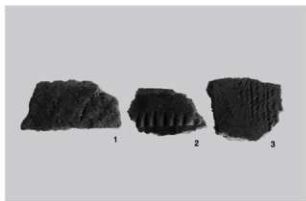
(3) G-4T遺構検出状況



(4) B-10T遺構検出状況



(5) D-D' 土層断面



(6) 出土遺物（番号は実測図の番号と同じ）

8. 川崎山遺跡 p 地点

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、市城南部中央、新川西岸の台地上にある。位置については、北裏畑遺跡 c 地点の項を参照されたい。p 地点は遺跡南部のやや西寄りの標高23mの平坦地である。

本遺跡においては、これまでに15地点で調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代中期の集落跡等を中心に各時代の遺物・遺構が検出されている。

調査の方法と経過

調査区は工場跡地で、施設は撤去され荒蕪地となっていた。5m×5mで区画し、区画内に2m×3～5mのトレンチを25箇所合計250㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年8月2日から12日で、2日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。3日・4日重機による掘削、トレンチ内精査。3日～5日土層調査。11日・12日重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北部の J-2 T 北西壁では、I-1層（しまりの弱い黒褐色土、表土）及びその下の I-2層（しまりのある黒褐色土・褐色土）はいずれも攪乱されている。その下に II b 層（暗褐色土で褐色土が斑状に入る、新期富士テフラ層）、II c 層（褐色土、ローム漸移層）、III 層（褐色土、ソフトローム）を確認した。III 層上面の標高は22.96～23.14mである。このトレンチの南端に遺構状のプランが検出されたが、ローム質の褐色土の下に暗褐色土が潜り込んでいるという土層の状態から、風倒木痕と判断した。1は褐色土、2は褐色土・暗褐色土、3は暗褐色土・褐色土で、径1～3cmのロームブロックをまばらに含み、4は褐色土で径10cm以下のロームブロックを多量含んでいた。一部に VI 層（褐色土・明褐色土、AT層）を確認した。調査区中央部の H-6 T、H-10 T では攪乱が深く II c 層以下しか確認できなかった。このあたりの III 層上面の標高は23.00～23.18mで、IV・V 層上面の標高は22.82～23.00mである。L-7 T、L-13 T では II b 層を確認し、III 層上面の標高は22.96～23.04mである。調査区南端の H-16 T では、III 層上面の標高は23.20～23.26m、IV・V 層上面の標高は22.94～23.05mと若干高くなっている。

遺構は検出されなかった。

遺物は、J-4 T から土器片1点が出土した（第32図）。深鉢の胴上部であろう。淡橙褐色で細砂を含む。横方向の沈線が1条引かれる。縄文時代晩期の杵状文であろうか。

調査のまとめ

遺構は検出されず、遺物の出土量も少なかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（1980年）『萱田町川崎山遺跡』（a 地点）

八千代市教育委員会（1992年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成3年度』（b 地点確認調査）

八千代市教育委員会（1994年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』（c 地点確認調査）

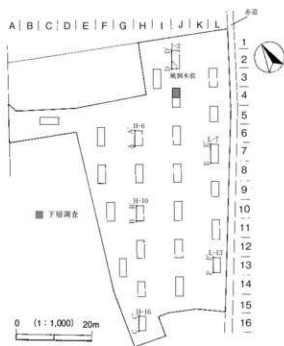
八千代市教育委員会（1998年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』（d 地点確認調査、e 地点確認・本調査）

八千代市教育委員会（1999年 a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』（f 地点確認調査）

八千代市川崎山遺跡調査会（1999年）『千葉県八千代市川崎山遺跡-埋蔵文化財発掘調査報告書-』（c 地点本調査）

八千代市教育委員会（1999年 b）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』（g 地点確認・本調査）

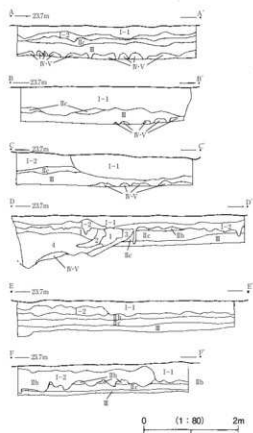
八千代市教育委員会（2000年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』（h 地点・i 地点



第30図 川崎山遺跡 p 地点トレンチ配置図



第32図 川崎山遺跡 p 地点出土遺物



第31図 川崎山遺跡 p 地点土層断面図

確認調査)

八千代市教育委員会 (2002年)「千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1」(b地点本調査)

八千代市教育委員会 (2003年)「千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書」(j地点確認・本調査)

八千代市遺跡調査会 (2003年)「千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点-萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書-」(d地点本調査)

八千代市遺跡調査会 (2004年)「千葉県八千代市川崎山遺跡 h 地点-店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書-」(h地点本調査)

八千代市遺跡調査会 (2006年)「千葉県八千代市川崎山遺跡 k 地点-宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」(k地点本調査)

八千代市教育委員会 (2008年 a)「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成19年度」(l地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2008年 b)「千葉県八千代市逆水遺跡 f 地点ほか-不特定遺跡発掘調査報告書 V-」(k地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2008年 c)「千葉県八千代市川崎山遺跡 m 地点発掘調査報告書」(m地点本調査)

八千代市教育委員会 (2008年 d)「千葉県八千代市川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書-宅地開発事業に先行する埋蔵文化財発掘調査-」(n地点本調査)

八千代市教育委員会 (2009年)「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度」(n地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2010年)「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度」(o地点確認調査)

図版10 川崎山遺跡p地点



(1) 調査状況



(2) A-A' 土層断面



(3) B-B' 土層断面



(4) C-C' 土層断面



(5) F-F' 土層断面



(6) 出土遺物

9. 北海道遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

北海道遺跡は、市域中央部、新川の西岸に所在する。萱田遺跡群の北東部、標高8～12mの低台地上に立地する。a地点の調査では、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒・土坑1基を検出した。

今回のb地点は、遺跡の北西端に位置する。標高は10.5m前後の平坦地である。

調査の方法と経過

2m×5mのトレンチを任意に3箇所合計30㎡分設定し、重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年8月17日から22日で、17日トレンチ設定、重機による掘削、トレンチ内精査。18日土層調査、遺構調査、実測記録。22日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

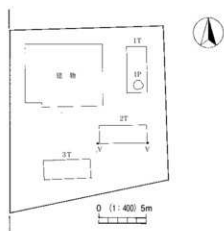
土層の観察所見としては、調査区中央東寄りの2T南壁では、I-1層(ゴミを含みしまりの弱い暗褐色土、表土)、I-2層(しまりのある暗褐色土)が合わせて約40cmの厚さである。IIc層(褐色土、ローム漸移層)がわずかに見られ、標高約10.08～10.18mでIII層(褐色土、ソフトローム)、標高約9.80～9.96mでIV・V層(褐色土、ハードローム)に達する。b地点はa地点に比べ標高が2mほど低く、それはIII層の標高にも反映しており、a地点では12.0～12.3mであった。

遺構は、1Tにおいて、不整形円の土坑を検出した。トレンチ内で1基のみの検出であるため完掘した。覆土は、1が暗褐色土・褐色土で焼土粒子少量含む、2が褐色土、3が暗褐色土・褐色土でしまりがやや弱い、4がローム質の褐色土である。上面規模は99cm×86cm、有段で底面は23～43cm×17～25cm、深さ29cmである。遺物は土師器の小細片4点と黒曜石剥片1点である。

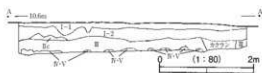
遺物は、土師器片19点、黒曜石剥片1点、合計20点が出土した。ほかに土師器片17点を表採した。うち4点を図示した(第37図)。1～3は土師器で2Tからの出土である。1は、甕の底部で、復元底径7.8cm、暗褐色・赤褐色・褐色で、粗砂を含む。器面は脆く肌荒れ状態である。2は、甕の口縁～頸部で、外面は褐色・赤褐色、内面は黒褐色・暗褐色で、細砂を含む。横方向のナデが顕著で、頸部外面にはミガキが施される。



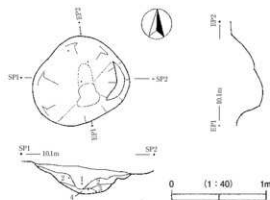
第33図 北海道遺跡 b 地点位置図



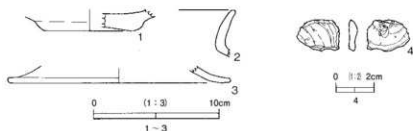
第34図 北海道遺跡b地点遺構配置図



第35図 北海道遺跡b地点土層断面図



第36図 北海道遺跡b地点1P土坑実測図



第37図 北海道遺跡b地点出土遺物

3は高坏脚部の底縁で、復元径17.6cmである。黒褐色・淡褐色で、粗砂を含む。4は1Pから出土した黒曜石剥片で、22mm×16.5mm、厚さ4mmである。

調査のまとめ

土師器などを伴う土坑1基を検出・調査した。遺物から見て古墳時代後期に属するものと判断した。a地点の結果と合わせ、標高10～12mの低台地に立地する本遺跡の一部を明らかにすることができた。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』（a地点）

図版11 南海道遺跡b地点



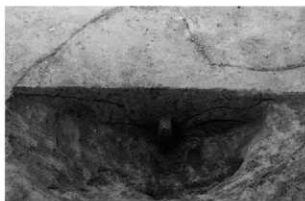
(1) 調査状況-1-



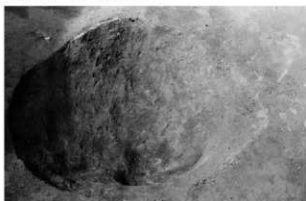
(2) 調査状況-2-



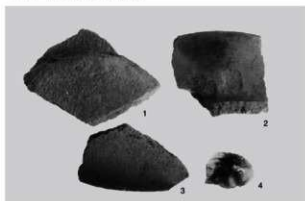
(3) A-A' 土層断面



(4) 1P土坑土層断面



(5) 1P土坑完掘状況



(6) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

10. 小板橋遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

小板橋遺跡は、市域の南部、新川西岸の小板橋小支台上にある。新川谷と高津川谷（ケイガラ谷津）、その支谷である名木支谷によって画された台地上が遺跡で、標高は24m以下である。d 地点は、遺跡北東部の標高20.8～22.2mの地点である。

小板橋遺跡については、昭和55年3月に宅地造成に先行して市教委が5,379.55㎡の確認調査を実施した。本調査は同年7月～8月に八千代市遺跡調査会によって実施され、古墳時代中・後期の竪穴住居跡13軒等（石製模造品工房跡を含む）が検出された（a 地点）。昭和59年8月にも宅地造成に先行して3,400㎡の確認調査を実施し、本調査は同年9月～10月に実施され、古墳時代中・後期の竪穴住居跡2軒等が検出された。この調査については、b 地点として八千代市遺跡調査会から報告書が刊行されている（八千代市遺跡調査会2008年）。平成17年3月には、福祉施設建設に先行し、遺跡範囲の南方で確認・本調査を実施し、古墳時代の溝状遺構3条、縄文土器（前期）、古墳時代土師器を検出した（c 地点）。

以上により、本遺跡は、石製模造品の工房跡を含む古墳時代中・後期の集落跡であり、権現後遺跡・北海道遺跡・川崎山遺跡とともに、新川西岸の石製模造品の工房群の一角を担う集団の遺跡と捉えることができる。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて5m四方のグリッドで区画し、2m×3～5、10mのトレンチを16箇所、合計170㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

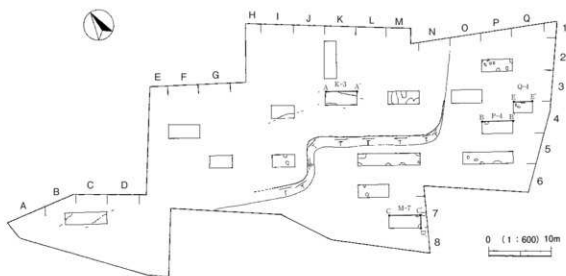
調査期間は、平成23年8月23日から9月8日で、8月23日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。24日トレンチ設定。24日～26日重機による掘削。25日・26日トレンチ内精査。29日～31日土層調査、実測記録。9月7日・8日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

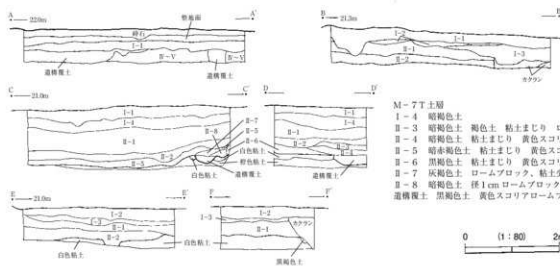
標高20mの台地上であるため、当然関東ローム層が検出されると予想したが、P-2T、O-3T等を掘ると地表下70～90cmで、ローム層を挟まずに白色粘土が現れた。結局、調査区の東～南の谷に面する部分は、



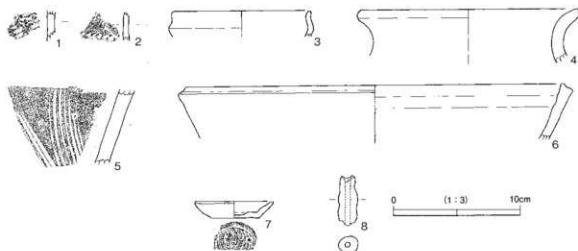
第38図 小板橋遺跡 d 地点位置図



第39図 小板橋遺跡d地点遺構配置図



第40図 小板橋遺跡d地点土層断面図



第41図 小板橋遺跡d地点出土遺物

第3表 小板橋遺跡d地点出土遺物観察表(第41図)

No.	出土地点	器種・器形	部位・状態	計測値(mm)	○粘土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	P-2	深鉢か	小片	—	○粗砂 ●汚 暗褐色 内) 淡褐色	外) 縦な押し引き5列 内) ナデ	縄文土器
2	P-2	壺小甕	口縁部	—	○粗砂 ●淡褐色	外) 縦合口縁の下端に厚み、横方向ナデ 内) ナデ	弥生後期
3	K-3	坏	口縁部	直径口径110	○粗砂 ●汚 暗褐色・黒褐色 内) 淡褐色	外) 横方向のナデ 内) 横方向のナデ	古墳時代前期 土師器
4	P-2	甕	口縁部	直径口径126	○粗砂 ●汚 淡褐色 内) 淡褐色	外) 横方向のナデ 内) 横方向のナデ、ミギキ、斜方向のナデ	古墳時代 土師器
5	O-5~ P-5	土器すり鉢	胴上部 くすべ焼成	—	○粗砂・細砂多 ●汚 赤褐色・褐色 内) 黒色	外) ナデか 内) 7本単位の手すり目	中世末
6	M-7	土器すり鉢	口縁部 くすべ焼成	直径口径312	○粗砂・細砂 ●黒灰色 顔土 淡褐色	コテロ成形、口唇上面に厚み	16世紀
7	P-2	かわらけ	口縁部	直径口径62、直径底径38 残存高13	○細砂・赤褐色灰土 ●淡褐色	コテロ成形	16世紀
8	M-3	管状土鉢	一部欠損	長40×径13.5×13 9.3g	○細砂 ●黒灰色	凹凸のある縦線な作り	

過去に一度粘土層まで削り取られているらしいことがわかった。出土遺物と合わせて考えると、中世の台地整形遺構と判断された。駐車場が高く、畑地が一段低くなっているのは、最近の造成工事の結果ではなく、中世の地形改変に起因する可能性がある。

土層の観察所見としては、調査区東部のP-4 T北東壁では、I-1層(暗褐色土、表土)、I-2層(暗褐色土・粘土)、I-3層(暗褐色土・粘土が混じり合う、攪乱含む)、II-1層(暗褐色土、径2~3mm以下の黄色スコリア・焼土粒子をまばらに含む)、II-2層(暗褐色土、II-1層に似るが可塑性がより強い)が認められた。表土や攪乱、厚さ40cm前後の暗褐色土(II-1・2層)が堆積し、その下に白色粘土が現れる。白色粘土の標高は20.20~20.36mである。その北東のQ-4 Tもほぼ同様の土層で、白色粘土の標高は20.10~20.24mである。調査区南部のM-7 Tでは、暗褐色土はさらに厚く80cmに及び、粘土層の直上には焼土まじりで赤色を帯びる層が見られた。粘土の標高は、19.45~19.73mと低くなる。調査区北部のK-3 Tは一段高い区域であるが、ここでも基本層序の多くは失われており、地表下40~57cm、標高21.23~21.40mでハードローム層に達した。溝跡が検出され、その覆土は暗褐色土・黒褐色土で、径1cmのロームブロック・径5mm以下の黄色スコリアを多量、炭化材片を含みザラついた感触であった。

遺構は、前述した中世台地整形遺構のほか、大小の土坑32基が検出され、溝跡は1条と推定し、やはり中世のもと判断した。但し、本調査の結果、溝跡の在り方等、一部に異なった所見を得ている。

遺物は、古墳時代土師器片や中~近世の瓦質土器・素焼土器片が47点、焼成粘土塊7点、すり鉢片・常滑甕片が各3点、陶器片が2点、縄文土器片・弥生土器片・磁器片・かわらけ片・土製品各1点、合計67点が出土した。うち8点を図示した(第41図・第3表)。

調査のまとめ

遺構としては、中世の台地整形遺構・土坑32基・溝跡1条を確認し、遺物は古墳時代の土師器、中世の陶器・すり鉢を確認した。今回の調査により、本遺跡において初めて大規模な中世遺跡を捉えることができ、近世に栄えた大和田宿の前史に関わる新知見を得ることができた。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会(2008年)『千葉県八千代市小板橋遺跡—b地点埋蔵文化財発掘調査報告書—』

図版12 小板橋遺跡 d地点



(1) 調査状況-1-



(2) 調査状況-2-



(3) O-5~P-5T遺構検出状況



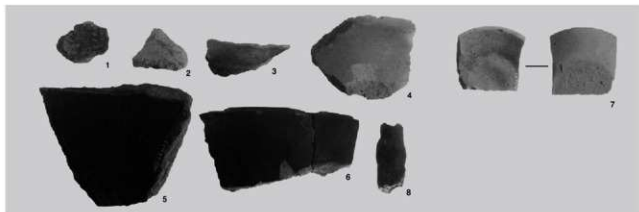
(4) M-3T遺構検出状況



(5) A-A' 土層断面



(6) F-F' 土層断面



(7) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

11. 大和田新田芝山遺跡 e 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地等については、d 地点の項を参照されたい。

e 地点は、遺跡北部、標高27m前後の平坦地に位置する。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて5mごとに区画し、区画ごとに2m×5mを原則としてトレンチを設定した。トレンチ面積は合計259㎡で、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。トレンチNoはアルファベットと数字の組み合わせで表現した。

調査期間は、平成23年9月20日から10月11日で、9月20日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。22日台風の大風により設定したトレンチの釘が抜けてしまったため、復元作業等を行う。実測作業。26日～28日重機による掘削、トレンチ内精査。27日～29日土層調査。29日・30日遺構調査、下層調査。10月5日・11日重機による埋め戻し作業、機材を撤収し、調査を終了した。台風・降雨の影響を多く受けた調査であった。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北部のI-2T西壁では、I-1層(表土)・I-2層(耕作土)・攪乱の下にIIb層(褐色土、明褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層)、IIc層(褐色土、ローム漸移層)、III層(褐色土、ソフトローム)、IV・V層(褐色土、ハードローム)という土層が認められ、他のトレンチもほぼ同様であった。III層上面の標高は、北部のI-2T西壁で26.28～26.36m、中央部のG-8T西壁で26.56～26.68m、やや南寄りのE-12T西壁で26.68～26.76m、南部のE-16T西壁で26.92～27.02mと次第に高くなっていた。

遺構は、I-12Tで長楕円形の土坑1基が検出された。トレンチ内1基のみの検出であるため完掘した。覆土は、1が褐色土を斑状に含む暗褐色土で、緻密であり、焼土粒子・炭化物をごくまばらに含み、2が緻密な褐色土である。規模は上面長径109cm、短径59cm、有段で底面最深部は8×6cmの円形、検出面からの深さ29cmである。長軸方位はN-22.5°-Wである。遺物は縄文土器と見られる無文土器小片が2点出土した。縄文時代の土坑と判断した。

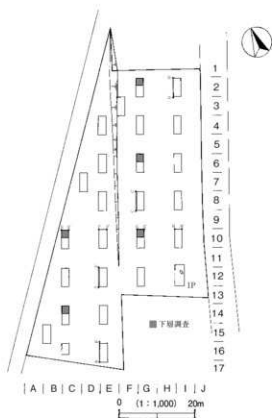
遺物は、縄文土器片21点、土師器片・素焼土器片5点、陶磁器片9点、焼成粘土塊・小礫各2点、鉄製品・鉄滓・砥石片・石盤片各1点合計43点が出土した。また表採で土器片5点、泥面子1点を得た。このうち7点を図示した(第45図・第4表)。

調査のまとめ

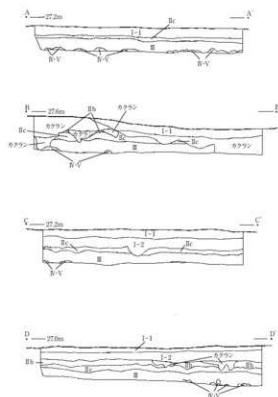
遺構としては、縄文時代の土坑1基を検出・調査した。遺物は、前期から晩期までの縄文土器などが出土した。

第4表 大和田新田芝山遺跡 e 地点出土遺物観察表(第45図)

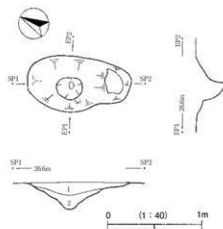
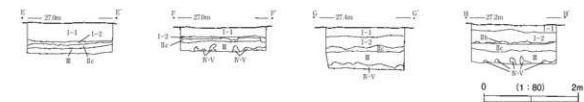
No.	出土地点	器種・器形	部位・状態	計測値(mm)	○胎土/石粒	●色調	形状・調整・文様などの特徴	その他
1	G-2	深鉢	胴上部 底曲面	—	○黄緑・粗砂	●褐色・暗灰褐色	外) 器底文・紅彩文 内) ナナ	縄文前期 深鉢式
2	B-15	深鉢	胴部	—	○粗砂 ●暗褐色・褐色・黒灰色		外) 横方向沈線2条・縄文R.L.・磨削し 内) 溝線	縄文中期 加磨料耳式
3	B-15	深鉢	胴上部	—	○粗砂 ●暗褐色		外) 横方向沈線・沈線・縄文R.L. 内) ナナ	縄文中期 加磨料耳式
4	B-15	深鉢	胴上部	—	○粗砂・細礫 ●暗褐色・黒褐色		外) 磨削した沈線・縄文 内) ナナ	縄文前期 加磨料耳式
5	B-15	直状口縁 深鉢	口縁直縁部 付直	—	○粗砂・細砂 ●暗褐色・暗褐色		外) 瘤文・沈線・ミザキ・縄文 内) ナナ	縄文晩期 直山耳式
6	G-6	深鉢	口縁部	—	○粗砂・細砂 ●暗褐色・灰褐色		外) 瘤文ナナ 内) 横方向ナナ	縄文晩期
7	E-16	砥石	一部欠損	36×31×厚さ2	○黄緑 ●灰褐色		本使用前に磨きかけ残存。本戸直前に 埋めあり。	定常か



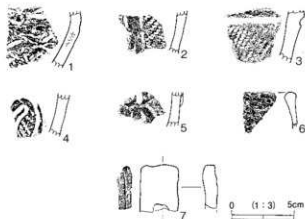
第42図 大和田新田芝山遺跡 e 地点遺構配置図



第43図 大和田新田芝山遺跡 e 地点土層断面図



第44図 大和田新田芝山遺跡 e 地点
1P土坑実測図



第45図 大和田新田芝山遺跡 e 地点出土遺物

図版13 大和田新田芝山遺跡 e 地点



(1) 調査状況



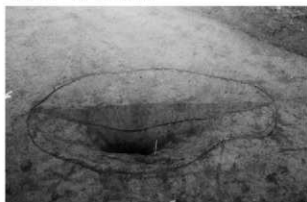
(2) A-A' 土層断面



(3) B-B' 土層断面



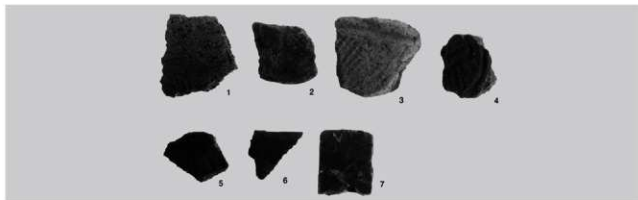
(4) G-G' 土層断面



(5) 1P土坑土層断面



(6) 1P土坑完掘状況



(7) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

12. 向山遺跡 g 地点

遺跡の立地と概要

向山遺跡は、市域中央やや南西寄り、新川低地から西に入る須久茂谷津とそこから枝分かれたスウメノ谷津によって画された台地上に所在する。本遺跡においては、これまでに8地点で調査が行われており、旧石器、縄文土器、須恵器などの遺物と土坑などが検出されている。遺構密度の高い遺跡ではないが、谷に面する区域に遺構・遺物が分布するものと予想された。

今回の g 地点は、遺跡北西部のスウメノ谷津に臨む標高17~23mの比較的大規模な区域であり、縄文時代の遺構などが存在する可能性が高いと考えられた。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて10mごとに区画し、これを基に2m×4mのトレンチを99箇所合計792m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年12月27日から平成24年2月10日で、12月27日機材搬入、環境整備。27日杭設置（1月18日まで）、トレンチ設定（同19日まで）、人力による掘削（同17日まで）。10日~25日重機による掘削。26日~31日土層調査。10日~2月9日トレンチ内精査。2日~9日重機による埋め戻し。10日機材撤収を行い、調査を終了した。

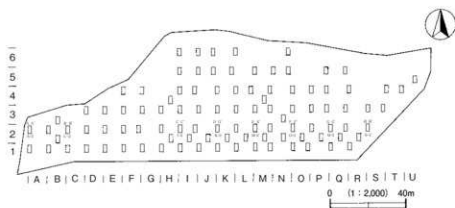
調査の概要

土層の観察所見としては、全体的にⅠ層（表土）、Ⅱa層（黒褐色土、腐植堆積土層）、Ⅱc層（ローム漸移層）、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）の堆積が確認された。調査区西端のA-2Tでは、Ⅱb層（暗褐色土主体・褐色土を斑状に含む、新期富士テフラ層）、Ⅱbc層（黒褐色土層、黒色土を主体とし暗褐色土を含む。谷部に堆積する）が確認された。Ⅲ層上面の標高は調査区西部のA-2T・C-2Tでは18.0m前後と低く、その東I-2T・K-2T・M-2Tでは22.6~22.7mと高くなり、さらにその東O-2T・Q-2Tでは22.0~22.08mと少し低くなり、東端のS-2Tでは22.44~22.5mであった。遺構は、検出されなかった。

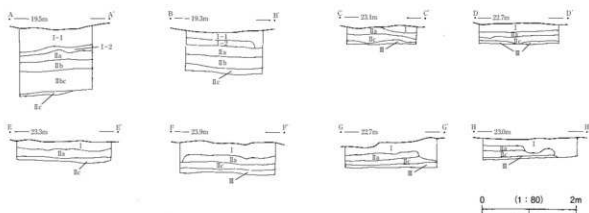
遺物は、A-2Tから石織・頁岩剥片各1点、M-3Tから焼礫1点が出土した。前二者を図示した（第



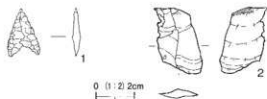
第46図 向山遺跡 g 地点・h 地点位置図



第47図 向山遺跡g地点トレンチ配置図



第48図 向山遺跡g地点土層断面図



第49図 向山遺跡g地点出土遺物

49図)。1はチャート製の石鏃である。先端部が欠損している。長さ23.5mm、最大幅17mm、厚さ4mm、重さ1.3g。縄文時代の石器である。2は頁岩剥片、37.5mm×20.5mm、厚さ4.5mm、重さ3.3gである。

調査のまとめ

g地点では、予想に反して遺構は検出されなかった。遺物の出土も少量であった。

本遺跡に関する調査報告書

財団法人千葉県文化財センター（1994年）『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他一東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書一』

八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（b地点）

八千代市教育委員会（2004年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』（d地点）

八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』（e地点）

図版14 向山遺跡 g 地点



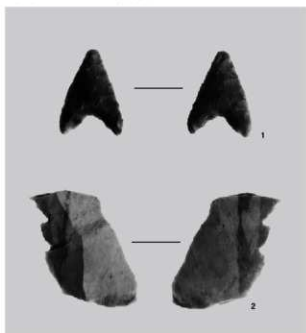
(1) 調査状況



(2) A-A' 土層断面



(3) D-D' 土層断面



(4) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

13. 向山遺跡 h 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地等については、g 地点の項を参照されたい。

h 地点は、遺跡西部の標高23mの平坦地に位置する。

調査の方法と経過

2m×3～5mのトレンチを10箇所合計80㎡分設定し、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。トレンチNoはアルファベットと数字の組み合わせで表現した。

調査期間は、平成24年1月4日から13日で、4日機材搬入、杭打ち、トレンチ設定、人力による掘削。5日重機による掘削、土層調査。5日～6日トレンチ内精査、10日・11日遺構調査。13日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

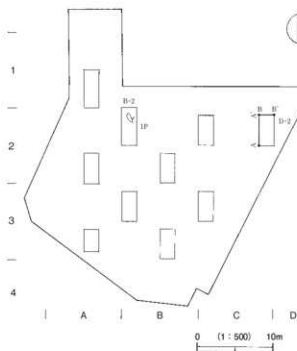
土層の観察所見としては、調査区東端のD-2Gでは、I-1層が表土、客土、I-2層が黒暗褐色旧表土、IIc層ローム漸移層、III層ソフトロームで、III層上面の標高は、22.62m前後であった。

遺構は、B-2Gで一部攪乱によって壊された長楕円形の土坑を検出した。トレンチ内で1基のみの検出であるため完掘した。覆土は、1が暗黄褐色土、2が暗褐色土、3が暗黄褐色土、4が暗褐色土、5が暗黄褐色土でローム主体、全体にややしまりがある。規模は、上面長軸の残存110cm、短軸70cm、底面も長楕円形で43cm×16cm、検出面からの深さ39cmである。長軸方位はN-19°-Wである。遺物は出土しなかったが、覆土や周辺地点の調査状況から考えて縄文時代のもものと判断した。

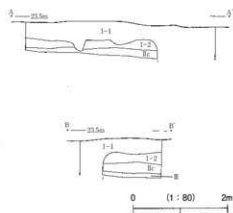
遺物は出土しなかった。

調査のまとめ

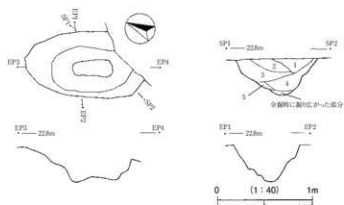
遺構として縄文時代土坑1基を検出・調査した。遺物は出土しなかった。



第50図 向山遺跡 h 地点遺構配置図



第51図 向山遺跡 h 地点土層断面図



第52図 向山遺跡 h 地点 1P 土坑実測図

図版15 向山遺跡 h 地点



(1) 調査状況



(2) A-A' 土層断面



(3) 1P 土坑土層断面



(4) 1P 土坑完掘状況

14. 南台遺跡c地点

遺跡の立地と概要

南台遺跡は本市域の北東部に位置し、新川の右岸の神野・保品地区に所在する。

遺跡の立地は新川の下流域、印旛沼への河口部の南岸の台地上にあたる。明治期に作成された「迅速測図」では印旛沼の西岸で直接沼に面していたが、戦後の大規模な干拓で沼の一部が埋め立てられ、現在では新川の右岸に位置づけられる。周辺の台地は下総下位段丘面と千葉段丘面の大きく二つの段丘面が確認されている（※文献5）。標高22m前後の上位の段丘面には境堀遺跡（No73）が立地し、標高10m前後の低位の段丘面を本跡が占地する。

南台遺跡の今回の調査区域であるc地点は、a地点とb地点の北側に隣接する。a地点は平成7年に確認調査が行われ、調査区域内の大半が大きく掘削され、遺構・遺物の検出はなかった（※文献1）。b地点の確認調査は平成15年に行われ、調査区の南側半分が掘削が確認され、残存する北側でも遺構は検出されていない。縄文土器や弥生土器、土師器の出土がみられた（※文献2）。本跡内において試掘調査が行われた地点もあるが、現時点まで本地点以外に遺構の検出はみられない。

調査の方法と経過

調査区は、調査着手時、竹林や栗林及びその他の立木が密集し残存していたため、任意の方向に基線を設け、それを基準とした。トレンチは樹木等を避け、任意の位置に幅1.5m、長さも任意で設定した。標高は、都市計画図上で標高10mから11m前後であることは推測できたが、近隣で標高の確かなポイントを特定できなかったため、調査区域で一番低いと目される境界杭（K2）を基準に計測することとした。そのため、断面図等の高さは $K2 = \pm 0m$ として表記した。また、土層の断面図は土層観察面の任意の2点を基線として土層図を作成し、基線を水平に補正し、実測図を完成させた。

調査の経過は、平成24年1月31日トレンチの設定を開始し、翌2月2日から3日まで重機によりトレンチ



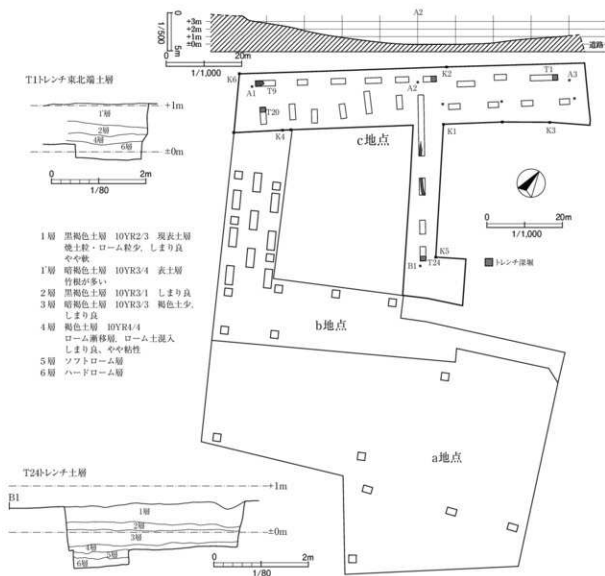
第53図 南台遺跡c地点位置図

を掘削した。トレンチの清掃及び遺構確認は2月3日から9日まで行い、9日にはローム下層の深掘りを完了し、機材を撤収した。13日には埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査の概要

今回の調査区は標高10m前後の低段丘面に位置しているが、現地で地形を観察すると、調査区中央付近に北西から南東に向かう浅い谷津があり、そのため、新川側で微高地状の地形を呈する。微高地との高低差は調査区域で一番低い谷津底から1mほどしかない。調査区東端で道路により掘削されているが、道路の反対側で同様の地形が残存している。

土層観察で谷津と微高地側で堆積に若干の相違がみられた。調査区北側のT1トレンチでは表土層（第54回中第1'層）下に黒褐色土層（同回中第2層）及び褐色土層（同回中第4層）が堆積し、ソフトロームの形成はみられずハードローム層（同回中第6層）が検出された。しかし、谷津底にあたるT24トレンチでは2層下に暗褐色土層（同回中第3層）とソフトローム層（同回中第5層）が確認され、現地表面より約1m下で関東ローム層を検出した。また、調査区西端の住居跡の検出されたT1トレンチでは現表土下約40cmでローム層に達する。栗畑造成のため、表土の一部が削平されているものの、新川側の土層形成に違いがみられた。



II 各調査の概要

調査は、調査対象区域1,824.91㎡に対して、上層でトレンチ24箇所、181㎡ 9.92%、下層ではトレンチ4箇所8㎡ 0.44%を調査した。その結果、遺構としては、竪穴住居跡1軒、溝状遺構1条を検出した。住居跡は調査区西端のT9トレンチで一部が検出され、周辺及び覆土中の出土遺物より古墳時代のもので推定された。中央の谷津底から検出された溝は検出された部分で緩やかに弧状を呈していた。トレンチ周辺や覆土中からの出土遺物が確認できないため、時期を特定するにはいたらなかった。

調査区域内で出土した遺物は、総数139点、内縄文土器19点、土師器101点、須恵器6点、その他に陶磁器6点、土師質土器1点などが出土している。縄文土器では前期から後期がまばらにみられた。土師器は古墳時代から奈良・平安時代まで広範囲なものであった。

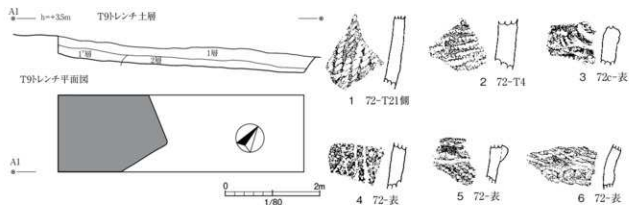
調査のまとめ

確認調査の結果、古墳時代の住居跡が1軒、溝状遺構1条が検出され、出土遺物では古墳時代前期及び奈良・平安時代の土師器の出土を確認した。これらの結果から、遺構が検出された区域、2地点の約100mに埋藏文化財が遺存すると判断された。

住居跡は調査区西端で検出され、本跡における集落としての展開は調査区西側に広がる平坦面が想定された。また、調査区中央の小谷津の存在や新川側に残存する小規模な微高地状の存在やそこに遺構遺物の検出がみられなかったことなど、この南台遺跡に新たな知見を得ることができた。

かつてこの台地の先端に、明治・大正期に破壊され、戦後土取り工事ににより壊滅した栗谷古墳が存在していた。しかし、その正確な位置は特定できなかった（※文献3、4）。調査中に当時を知る地元の方から現在の老人福祉施設のあたりであったということを教えていただいた。そこは本跡a地点にあたり、地山の掘削が激しく、遺構の検出ができなかった区域であり、状況的に合致していた。また、現況では本跡と同一の段丘面が続くように見えるが、古い地形図（※文献6）では下総下位段丘面が尾根状に北東に突出していたことが何れ、この尾根の先端に古墳が存在していた可能性は高いと考えられる。^{※1}

※参考文献 1. 八千代市教育委員会1996「市内遺跡発掘調査報告 平成7年度」 2. 八千代市教育委員会 2005「市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」 3. 滝口宏編 1961「印旛手賀」 4. 大川清1953「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代Na11』 5. 杉原重夫1970「下総台地西部における地形の発達」『地理学評論 43.12』 6. 八千代市 1999「八千代市の歴史 資料編原始・古代・中世」p322 注1 同様の指摘はHP「さわらびYの歴史・民俗・考古探索ノート」にもみられる。



第55図 遺構検出状況図



第56図 南台遺跡c地点出土遺物

図版16 南台遺跡c地点



(1) 調査区域



(2) 調査状況-1-



(3) 調査状況-2-



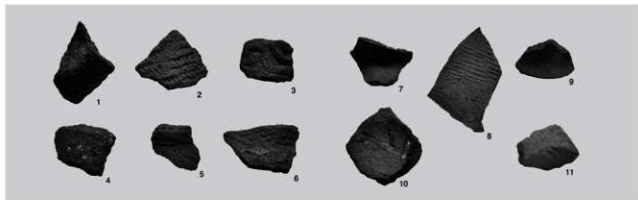
(4) 土層観察状況



(5) 遺構検出状況-1-



(6) 遺構検出状況-2-



(7) 出土遺物

15. ヲサル山南遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

ヲサル山南遺跡は、市域中央部西寄り、新川から西に入る須久茂谷津とその支谷に囲まれた台地上に立地する。本遺跡においては、これまでに2地点で調査が行われ、縄文時代中期前半の集落跡や早期・後期の遺物などが検出されている。今回の地点は、遺跡の北西部に当たり、現況畑地で標高は21m前後である。

調査の方法と経過

2m×4mのトレンチを23箇所、2m×2m・2m×10mのトレンチを各1箇所合計208m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年2月9日から17日で、9日機材搬入、杭設置。10日・13日トレンチ設定、重機による掘削。13日～16日トレンチ内精査。15日・16日土層調査。17日重機による埋め戻し、機材撤収を行い、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区南部のA-1G・A-3G・A-5G東壁で、I-1層表土（ローム質の客土）、I-2層（耕作土、黒褐色土）、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）を確認したのみで、土層の状態は不良であった。Ⅲ層上面の標高は、A-1Gで23.60～23.68m、A-3Gで22.94～23.07m、A-5Gで22.10～22.20mと地表面の標高と同様に南の方が高かった。

遺構は、A-4Gで検出された。規模から見て竪穴住居跡の南西コーナー付近と考えられ、覆土から縄文時代中期阿玉台式土器が出土しており、該期のものと判断した。

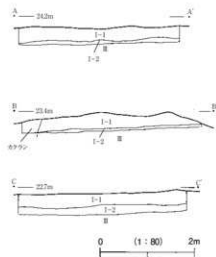
遺物は、縄文時代中期阿玉台式を主体とした縄文土器片25点、黒曜石剥片2点、須恵器1点、高師小僧1点、合計29点が出土した。また地表面採集で、縄文土器片31点、素焼土器4点、泥面子1点、かわらけ1点、焼礫1点、礫2点の合計40点を得た。うち12点を図示した（第60図・第5表）。



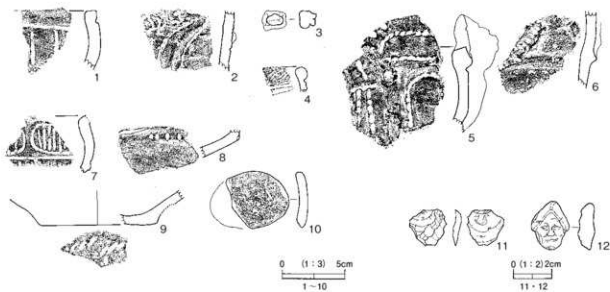
第57図 ヲサル山南遺跡 c 地点位置図



第58図 ラサル山南遺跡 c 地点遺構配置図



第59図 ラサル山南遺跡 c 地点土層断面図



第60図 ラサル山南遺跡 c 地点出土遺物

第5表 ヲサル山南遺跡c地点出土遺物観察表 (第60図)

No	出土地点	図様・形制	部位・状態	計測値 (mm)	□胎土/石片 ●胎土	彫刻・調整・文様などの特徴	その他
1	A-5	深鉢	口縁部	径元口徑200以上	□胎土・長石・石英・磁砂・磁礫 ●外) 磁褐色 内) 褐色	口縁上ナナギ 外) 横・縦方向押引き文 内) 横方向ナナギ・ミガキ	縄文中期 阿玉台式
2	B-4-4	深鉢	胴部	径元内径150 上方の径元内径150	□石英・長石・磁砂・磁礫・雲母・磁砂 ●外) 褐色 内) 灰褐色	外) 隆線と押引き文、輪痕痕と爪形文 内) 横方向ナナギ	
3	B-4-4	—	突起部	19×15×13	□磁砂・磁砂 ●褐色	突起が外れたもの	
4	B-5-4	深鉢	口縁部	—	□磁砂 ●外) 灰褐色・褐色 内) 褐色	外) 無彫刻文、帯状文か、深い沈溝 内) 横方向ナナギ	縄文後期 深行式か
5	表探	深鉢	口縁部	径元口縁 (内径) 290	□雲母・石英・磁砂・磁礫 ●外) 淡褐色 内) 淡灰褐色	滑らかな横長楕円形の突起、縦み・押引き文 外) 隆線・押引き文 内) 横方向ナナギ・ミガキ	
6	表探	深鉢	胴部	—	□雲母・長石・磁砂・磁礫 ●淡褐色	外) 隆線・手裏竹管による透刻刺突	
7	表探	鉢か	口縁部	径元口縁 (内径) 190	□雲母・石英・長石・磁砂・磁礫 ●外) 褐色 内) 褐色・褐色	外) 隆線・押引き文・沈溝 内) 横方向 ナナギ	縄文中期 阿玉台式
8	表探	浅鉢	胴曲部	径元外径240	□雲母・長石・石英・磁砂・磁礫 ●外) 褐色 内) 灰褐色	外) 押引き文、胴曲部に縦み・斜方向の ミガキ 内) 横方向ナナギ・ミガキ	
9	表探	浅鉢	底部	径元底径94	□雲母・石英・磁砂・磁礫 ●外) 褐色 内) 灰褐色	外) 凹れ 底外) 網代痕 内) ナナギ・ミガキ	
10	表探	土器片 円盤	深鉢胴部片 利用	45×44.5×7-7.5 2.5g	□石英・磁砂・磁礫 ●外) 赤褐色 内) 赤色	外) 肌瓦れ 内) ナナギ	
11	B-5-4	鏡片	—	195×18.5×3 1.1g	□肌曜石 ●赤色・透明		
12	表探	高脚子 壺残片	定形	25×20×8	□磁質 ●褐色	顔面、赤色があったらしく瓦る塗料の痕 跡あり。	

調査のまとめ

縄文時代中期阿玉台式土器が出土し、同時期の竪穴住居跡を1軒検出した。a地点と合わせ、当該期の集落跡が展開することを確認できた。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会 (2008年) 「千葉県八千代市逆水遺跡 (地点はc一不特定遺跡発掘調査報告書V-1) (b地点)

図版17 ヲサル山南遺跡c地点



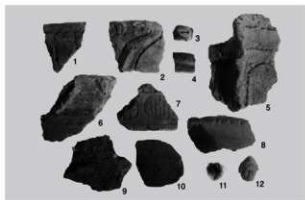
(1) 調査状況



(2) A-A' 土層断面



(3) A-4G遺構検出状況



(4) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

16. 北裏畑遺跡 d 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地等については、c 地点の項を参照されたい。

d 地点は、遺跡北部、川崎山遺跡との境で、標高24.2m前後の平坦地に位置する。現況は畑地である。

調査の方法と経過

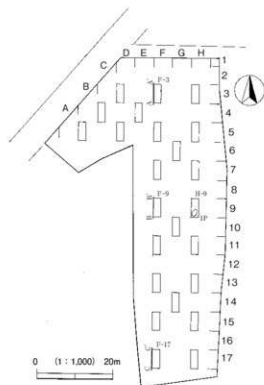
調査区を形状に合わせて5mごとに区画し、これを基に2m×5mのトレンチを設定した。トレンチ面積は合計240㎡で、これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。トレンチNoはアルファベットと数字の組み合わせで表現した。

調査期間は、平成24年2月24日から3月8日で、2月24日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。27日重機による掘削、トレンチ内精査。28日土層調査、実測記録。3月1日・6日遺構調査。8日重機による埋め戻し、機材撤去を行い、調査を終了した。

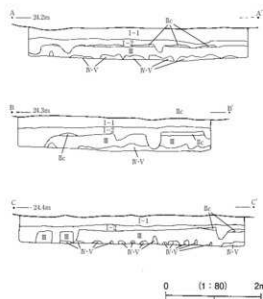
調査の概要

土層の観察所見としては、表土及び耕作土・攪乱があり、その下にⅡc層（褐色土、ローム漸移層）、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）、Ⅳ～Ⅴ層（褐色～明褐色土、ハードローム）が認められた。Ⅲ層の標高は、調査区北部のF-3 T西壁では、23.6m、中央部のF-9 T西壁では23.8m、F-11 T西壁では23.9m前後、調査区南部のF-17 T西壁では23.88～23.97mと、南側が高かった。Ⅳ～Ⅴ層の標高も同様に北部のF-3 Tでは、23.3～23.47m、南部のF-17 Tでは23.6～23.8mであった。

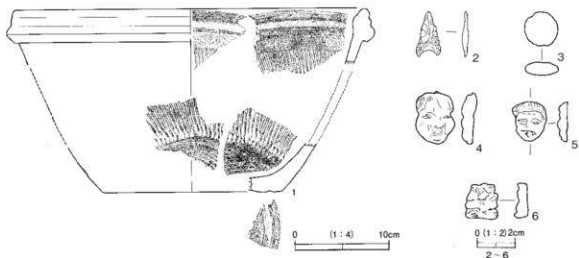
遺構は、調査区中央東寄りのH-9 Tで長楕円形の土坑を検出した。トレンチ内1基のみの検出であるため完掘した。覆土は、1が褐色土を斑状に含む暗褐色土で、しまり強く、炭化材片を含む。2は褐色土と暗褐色土がにじむように混じり合い、1よりしまりが弱くなる。3は暗褐色土。4はローム混じりの褐色土で、しまりが弱い。5はローム混じりの暗褐色土で、しまりが弱い。4以下は埋土と判断した。規模は上面長径



第61図 北裏畑遺跡 d 地点遺構配置図



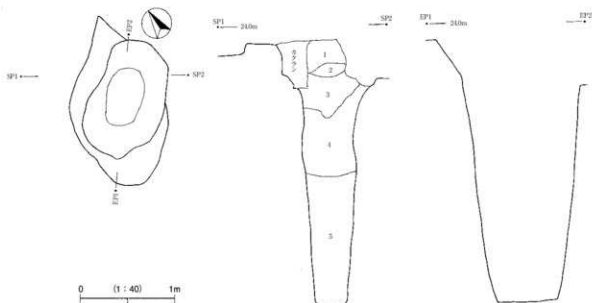
第62図 北裏畑遺跡 d 地点土層断面図



第63図 北裏畑遺跡d地点出土遺物

第6表 北裏畑遺跡d地点出土遺物観察表 (第63図)

No.	出土地点	器種・器形	部位・基礎	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他	
1	D-3	すり鉢	口縁部・底部各2点 接合せず	直径1径370 径元径188 底元高193	○石灰細砂 顔土) 赤褐色・紫褐色	●紫褐色 ●紫褐色	口ノリ成割。外) 横方向の十字 内) 掘り目約3mm間隔。底面は浅い格子状	
2	表探	石鏡	完整	径24×幅13×厚3.35 0.9g	○チヤート ●灰色		縄文時代石鏡	
3	表探	泥面子 碁石形	完整	18×17.5×厚54.5	○磁密 ●淡褐色			
4	表探	泥面子 碁石形	一部欠損	27.5×20×厚37.5	○磁密 ●淡褐色		顔面	
5	表探	泥面子 碁石形	完整	21×18×厚5.5	○磁密 ●淡褐色		顔面	
6	表探	泥面子 碁石形	一部欠損	18.5×17×厚3.7	○磁密 ●淡褐色		大黒塗か	



第64図 北裏畑遺跡d地点1P土坑実測図

153cm, 短径99cm, 底面長径60cm, 短径40cm, 検出面からの深さ280cmである。長軸方位はN-35°-Eである。遺物は無かった。形態から縄文時代の陥穴と判断した。

遺物は、土器片・土師器片7点, 陶磁器片8点, すり鉢片4点(但し同一個体), 焼成粘土塊・鉄製品各2点, 礫4点, 合計27点が出土した。また, 表採で土師器片・素焼土器片37点, 陶磁器片32点, 石鏃1点, 泥面子4点などを得た。うち6点を図示した(第63図・第6表)。

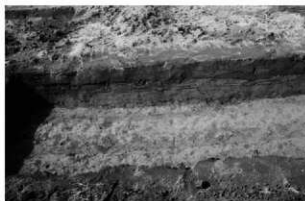
調査のまとめ

縄文時代陥穴と考えられる土坑1基を検出・調査した。隣接する川崎山遺跡の台地中央部の状況と同じように, 当該遺構が広く散漫に分布していることが捉えられた。遺物は土師器片などが出土した。

図版18 北裏畑遺跡d地点



(1) 調査状況



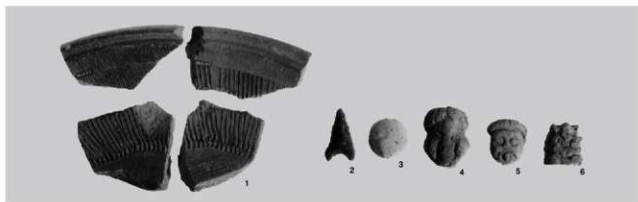
(2) A-A' 土層断面



(3) 1P土坑土層断面



(4) 1P土坑完掘状況



(5) 出土遺物(番号は実測図の番号と同じ)

17. 白筋遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

白筋遺跡は、市城南部中央、新川の東岸に位置する。入江状の辺田前・沖塚前低地を南に臨む台地上に立地する。遺跡範囲内には、市指定文化財の根上神社古墳がある。これまでの調査で同古墳の周溝や縄文時代早期土器片、古墳時代遺物、奈良・平安時代の堅穴住居跡や遺物が検出されている。今回の地点は、遺跡のやや南寄りに当たり、標高は27mである。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて10mごとに区画し、これを基に2m×4～5mのトレンチを8箇所74㎡分設定した。重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年2月28日から3月2日で、2月28日機材搬入、28日～3月2日重機による掘削、トレンチ内精査。1日土層調査。2日機材撤収を行い、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区南部のC-3G北西壁では、I-1が表面のアスファルト舗装、I-2がロームと暗褐色土が混合された造成土で合わせて厚さ125～140cmあり、その直下でⅢ層ソフトローム層に達していた。良好な土層が残っていなかった。遺構は検出されなかった。

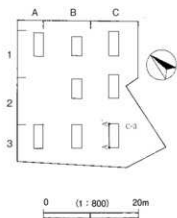
遺物は、A-1Gから土師器片3点が出土した。うち2点を図示した。1は甕の胴部で、淡褐色、胎土に粗砂を含む。外面ヘラ削り、内面ナデが施される。2は坏の底部で、淡褐色、胎土に粗砂を含む。底外面に糸切痕が見える。

調査のまとめ

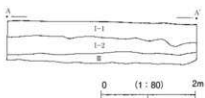
遺構は検出されなかった。遺物は少量であるが、古墳時代～奈良平安時代の土師器が出土した。



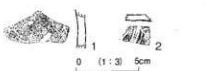
第65図 白筋遺跡 c 地点位置図



第66図 白筋遺跡 c 地点トレンチ配置図



第67図 白筋遺跡 c 地点土層断面図



第68図 白筋遺跡 c 地点出土遺物

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会 (2002年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』(a 地点第3次確認本調査)

八千代市遺跡調査会 (2007年)『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡 八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(a 地点)

八千代市教育委員会 (2008年)『千葉県八千代市白筋遺跡 b 地点発掘調査報告書』(b 地点本調査)

八千代市教育委員会 (2009年)『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』(b 地点確認調査)

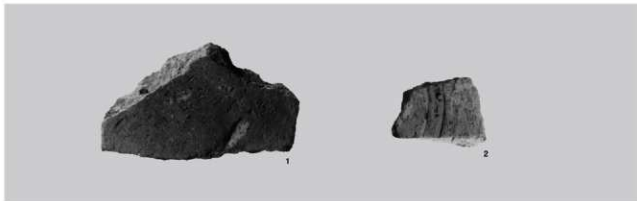
図版19 白筋遺跡 c 地点



(1) A-3 G 完掘状況



(2) A-A' 土層断面



(3) 出土遺物 (番号は実測図の番号と同じ)

18. 川崎山遺跡 q 地点

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡の立地等については、p 地点及び北裏畑遺跡 c 地点の項を参照されたい。

q 地点は、遺跡南西部、標高23.7m前後の平坦地に位置する。現況は畑地である。

調査の方法と経過

調査区を形状に合わせて5mごとに区画し、これを基に2m×5mのトレンチを19箇所計190m分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年3月12日から19日で、12日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。13日重機による掘削、トレンチ内精査。13日・14日土層調査。14日・15日遺構調査。19日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、調査区北西部のB-4T北東壁では、Ⅱc層(褐色土、ローム漸移層)、Ⅲ層(褐色土、ソフトローム)が認められ、Ⅳ～Ⅴ層(褐色土、ハードローム)の上面までを確認した。Ⅲ層の上面の標高は、23.40～23.44m、Ⅳ～Ⅴ層の上面の標高は、23.20m前後であった。調査区南東部のE-11T北東壁では、表土・耕作土・攪乱の間にⅡb層(褐色土、新期富士テフラ層)が認められた。Ⅲ層上面の標高は、23.16～23.3m、Ⅳ～Ⅴ層上面の標高は、23.02～23.09mで、北西部の方が高かった。

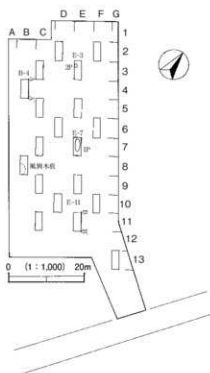
遺構は、調査区中央部のE-7Tで土坑1基(1P)、北西部のE-3Tで土坑1基(2P)が検出された。1P土坑はⅡb層より下で検出されたことや形態・覆土の状態から、縄文時代の陥穴と判断した。トレンチ内1基のみの検出であるため完掘した。覆土は、1が褐色土、2が褐色土を斑状に含む暗褐色土、3が褐色土、4は3よりも暗色の褐色土、5はローム混じりのしまりの弱い褐色土、6はやはりローム混じりの褐色土であるが5よりもしまりがある。規模は、上面長径317cm、短径109cm、底面長径273cm、短径6～15cm、深さ120cm、長軸方位はN-32.5°-Wである。

2P土坑は覆土の状態から近世以降のものと判断した。規模は97cm×93cmの略円形であった。

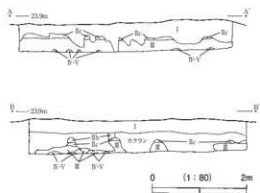
遺物は、土器片4点、陶器片2点、素焼瓦片・焼成粘土塊各1点、礫2点、合計10点が出土した。うち縄文土器1点を図示した。深鉢の胴部で、赤褐色、割口は黒色、胎土に繊維・細砂を含み、縄文が施文される。前期黒浜式と考えられる。本遺跡で該期の遺物は、a地点・h地点で少量の出土例がある。

調査のまとめ

縄文時代の陥穴1基を検出・調査した。今年度は北裏畑遺跡 d 地点の1基と合わせ、川崎山の台地上には、陥穴が広く散漫に分布することが確認された。遺物は小細片が少量出土した。



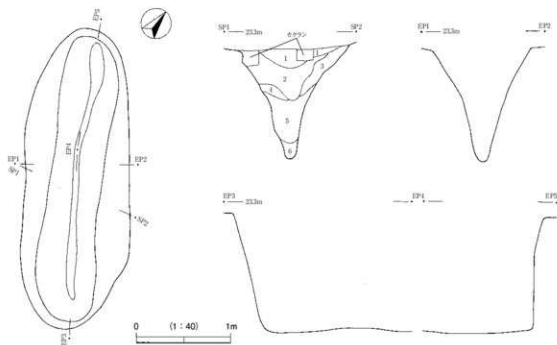
第69図 川崎山遺跡 q 地点遺構配置図



第70図 川崎山遺跡 q 地点土層断面図



第71図 川崎山遺跡 q 地点出土遺物



第72図 川崎山遺跡 q 地点 1P 土坑実測図

図版20 川崎山遺跡 q 地点



(1) 調査状況



(2) A-A' 土層断面



(3) B-B' 土層断面



(4) 1P土坑土層断面



(5) 1P土坑完掘状況



(6) 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし しなにいせきはくつちょうさほうこくしょへいせい24ねんど							
書名	千葉県八千代市市内道路発掘調査報告書 平成24年度							
副書名	道地道路g地点 道地道路h地点 道地道路i地点 大和田新田芝山道路d地点 中ノ台道路a地点 上谷津台南道路g地点 北裏畑道路c地点 高津新田道路d地点 平沢道路c地点 川崎山道路p地点 南海道道跡b地点 小板橋道路d地点 大和田新田芝山道路e地点 向山道路g地点 向山道路h地点 南台道路c地点 ラサル山南道路c地点 北裏畑道路d地点 白防道路c地点 川崎山道路q地点							
編著者名	常松成人							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047 (483) 1151代表							
発行年月日	西暦2013年3月25日							
ふりがな 所取道路名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	道路番号					
道地道路g地点	平戸字沼上36番4の一部	1221	18	35度 46分 28秒	140度 6分 53秒	20110415 ～ 20110422	上層54 下層8 /552.98	個人住宅
道地道路h地点	平戸字沼上36番4の一部	1221	18	35度 46分 28秒	140度 6分 53秒	20110510 ～ 20110517	上層52 下層10 /518.52	個人住宅
道地道路i地点	平戸字沼上36番9・10	1221	18	35度 46分 27秒	140度 6分 54秒	20110610 ～ 20110616	上層30 下層6 /297.71	個人住宅
大和田新田芝山道路 d地点	大和田新田字長兵衛野 769-1-3ほか	1221	159	35度 43分 58秒	140度 5分 2秒	20110426 ～ 20110513	376/ 4,000	グラウン ド整備
中ノ台道路a地点	小池字西台74-1の一部ほか	1221	2	35度 46分 44秒	140度 5分 31秒	20110519 ～ 20110606	198/ 1,983	福祉施設 建設
上谷津台南道路 g地点	上高野字上谷津台1100番2ほか	1221	229	35度 43分 25秒	140度 8分 19秒	20110526 ～ 20110609	163 / 1,672.24	宅地造成
北裏畑道路c地点	荒田町字荒田道827番7	1221	242	35度 43分 12秒	140度 6分 20秒	20110624 ～ 20110629	42 / 421.59	個人住宅
高津新田道路 d地点	八千代台南二丁目18-2ほか	1221	250	35度 41分 38秒	140度 5分 28秒	20110704 ～ 20110714	278 / 2,955.85	宅地造成
平沢道路c地点	上高野字平沢152番1	1221	217	35度 44分 40秒	140度 7分 40秒	20110706 ～ 20110720	200 / 2,000.02	駐車場
川崎山道路p地点	荒田町字川崎山779番ほか	1221	241	35度 43分 19秒	140度 6分 27秒	20110802 ～ 20110812	上層250 下層5 / 2,543.81	宅地造成
南海道道跡b地点	荒田町字西堀728番1	1221	182	35度 44分 6秒	140度 6分 28秒	20110817 ～ 20110822	30 / 293.31	宅地造成

小坂橋遺跡 d 地点	大和田字中畑ケ169-1 ほか	1221	245	35度 42分 59秒	140度 6分 33秒	20110823 ～ 20110908	170 /1,846.8	宅地造成
大和田新田芝山遺跡 e 地点	大和田新田字芝山877-13 ほか	1221	159	35度 44分 13秒	140度 5分 4秒	20110920 ～ 20111011	259 / 2,515.50	宅地造成
向山遺跡 g 地点	大和田新田字向山499番1, 501番1の一部	1221	173	35度 43分 50秒	140度 5分 42秒	20111227 ～ 20120210	792 / 10,813.85	宅地造成
向山遺跡 h 地点	大和田新田字向山501番2・6	1221	173	35度 43分 47秒	140度 5分 39秒	20120104 ～ 20120113	80 /820.86	店舗建設
南台遺跡 c 地点	神野字南台795-3 ほか	1221	72	35度 45分 54秒	140度 7分 59秒	20120131 ～ 20120213	上層181 下層8 / 1,824.91	駐車場
ササノ山南遺跡 c 地点	大和田新田字ササノ山590-1 ほか	1221	172	35度 44分 9秒	140度 5分 57秒	20120209 ～ 20120217	208 / 2,716.71	宅地造成
北裏畑遺跡 d 地点	萱田町字北裏839番ほか	1221	242	35度 43分 15秒	140度 6分 25秒	20120224 ～ 20120308	240 / 2,363.25	集合住宅
白筋遺跡 c 地点	村上字白筋2701ほか	1221	208	35度 43分 30秒	140度 7分 10秒	20120228 ～ 20120302	74 /808.02	店舗建設
川崎山遺跡 q 地点	萱田字中台2261番の一部ほか	1221	241	35度 43分 19秒	140度 6分 24秒	20120312 ～ 20120319	190 / 1,883.77	集合住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道地遺跡 g 地点	集落跡	縄文時代、弥生時代、 古墳時代	なし	縄文土器、弥生土器（後期） 古墳時代土師器	
道地遺跡 h 地点	集落跡	縄文時代、弥生時代、 古墳時代	弥生時代後期～古墳時代初期 竪穴住居跡1軒	縄文土器（中期）、弥生土器（後期） 古墳時代前期土師器	
道地遺跡 i 地点	集落跡	縄文時代（中期）	縄文時代（中期）竪穴住居跡 1軒	縄文土器、縄文時代石器	
大和田新田芝山遺跡 d 地点	包蔵地	縄文時代、奈良・ 平安時代	奈良・平安時代土坑1基	縄文土器、縄文時代石器	
中ノ台遺跡 a 地点	包蔵地	近世	近世溝跡1条	古墳時代前期土師器 近世内耳土器・泥面子	
上谷津山南遺跡 g 地点	包蔵地	縄文時代	なし	縄文土器	
北裏畑遺跡 c 地点	包蔵地	近世～近代	近世～近代土坑3基	なし	
高津新田遺跡 d 地点	牧跡	近世	近世野馬糞2条	近世陶磁器	
平沢遺跡 c 地点	集落跡	縄文時代、弥生時代、	縄文時代土坑1基 弥生時代後期竪穴住居跡2軒 近現代溝跡2条	縄文土器、弥生土器（後期）	
川崎山遺跡 p 地点	包蔵地	縄文時代	無し	縄文土器	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南海道遺跡 b 地点	包蔵地	古墳時代	古墳時代土坑 1 基	古墳時代土師器、黒曜石割片	
小坂橋遺跡 d 地点	集落跡	中世	中世台地整形遺構・土坑32基・溝跡 1 条	古墳時代土師器、中世陶器・すり鉢	
大和田新田芝山遺跡 e 地点	包蔵地	縄文時代	縄文時代土坑 1 基	縄文土器	
向山遺跡 g 地点	包蔵地	縄文時代、奈良・平安時代	なし	縄文時代石器	
向山遺跡 h 地点	包蔵地	縄文時代、奈良・平安時代	縄文時代土坑 1 基	なし	
南台遺跡 c 地点	集落跡	縄文時代、古墳時代	古墳時代竪穴住居跡 1 軒・溝状遺構 1 条	縄文土器、土師器、須恵器	
ワサル山南遺跡 c 地点	集落跡	縄文時代	縄文時代（中期）竪穴住居跡 1 軒	縄文土器、縄文時代石器	
北裏畑遺跡 d 地点	包蔵地	縄文時代、近世	縄文時代陥穴 1 基	縄文時代石器、近世陶器・泥面子	
白筋遺跡 c 地点	包蔵地	古墳時代、奈良・平安時代	なし	古墳時代土師器	
川崎山遺跡 q 地点	包蔵地	縄文時代、近世	縄文時代陥穴 1 基 近世土坑 1 基	縄文土器、奈良・平安時代土師器、近世陶器	
要 約	道地遺跡 g 地点	遺構は検出されなかった。			
	道地遺跡 h 地点	弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居跡 1 軒を検出した。			
	道地遺跡 i 地点	縄文時代中期加曾利 E 3～4 式期の竪穴住居跡 1 軒と遺物を検出した。			
	大和田新田芝山遺跡 d 地点	奈良・平安時代の土坑 1 基を検出・調査した。			
	中ノ台遺跡 a 地点	近世の溝跡を検出し、古墳時代前期土師器・近世内耳土器・泥面子などが出土した。			
	上谷津台南遺跡 g 地点	遺構は検出されず、遺物も少なかった。			
	北裏畑遺跡 c 地点	近世以降の土坑 3 基を検出した。遺物は出土しなかった。			
	高津新田遺跡 d 地点	近世野馬廻と考えられる溝跡 2 条を検出し、小数量に関わる高津新田野馬廻遺跡に新しい地点（h 地点）を加えた。			
	平沢遺跡 c 地点	弥生時代後期の竪穴住居跡が 2 軒検出され、本地点でも a・b 地点と同様、弥生時代後期の集落跡が展開していることがわかった。また縄文時代の遺構・遺物も散在していることが確認された。			
	川崎山遺跡 p 地点	遺構は検出されず、遺物も少なかった。			
	南海道遺跡 b 地点	古墳時代後期の土坑 1 基を検出・調査した。			
	小坂橋遺跡 d 地点	遺構としては、中世の台地整形遺構・土坑32基・溝跡 1 条を確認し、遺物は古墳時代の土師器、中世の陶器・すり鉢を確認した。今回の調査により、本遺跡において初めて大規模な中世遺跡を捉えることができ、近世に承えた大和田宿の前史に関わる新知見を得ることができた。			
	大和田新田芝山遺跡 e 地点	縄文時代の土坑 1 基を検出・調査した。前期から晩期までの縄文土器片が出土した。遺構は検出されず、遺物も少なかった。			
	向山遺跡 h 地点	縄文時代の土坑 1 基を検出・調査した。遺物は出土しなかった。			
南台遺跡 c 地点	本遺跡で初めて古墳時代の竪穴住居跡及び溝状遺構を検出するなど、新知見を得た。				
ワサル山南遺跡 c 地点	縄文時代中期阿玉台式期の竪穴住居跡 1 軒と遺物を検出した。				
北裏畑遺跡 d 地点	縄文時代の陥穴を 1 基検出・調査した。遺物は土師器片などが出土した。				
白筋遺跡 c 地点	遺構は検出されなかった。土師器が少量出土した。				
川崎山遺跡 q 地点	縄文時代の陥穴を 1 基検出・調査した。北裏畑遺跡 d 地点の結果を合わせ、川崎山の台地上に縄文時代の陥穴が広く散在に分布することが確認された。				

千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書
平成 24 年度

発 行 日 平成 25 年 3 月 25 日
編 集 ・ 発 行 八千代市教育委員会 教育総務課
〒 276-0045 八千代市大和田 138-2
TEL 047-483-1151
印 刷 金子印刷企画
